



# JAAGA だより

日米エアフォース友好協会  
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会  
〒160-0002  
東京都新宿区四谷坂町9番7号  
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F  
編集：JAAGA 事務局  
印刷：東伸社  
ホームページ：<http://www.jaaga.jp/>

訪米行事  
に代えて

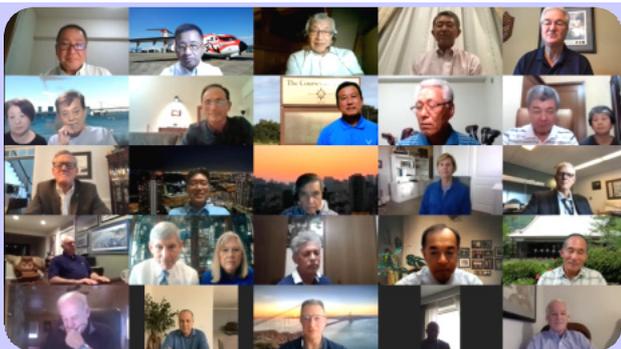
## — JAAGA バーチャル懇親会開催 — JAAGA Virtual Social Event, with honorary members and special guests, was held on 11 Sept. 2020

令和2年9月11日（金）21時（日本時間）から1時間余り、会議ソフトを活用した名誉会員等との日米バーチャル懇親会が開催された。

本年は新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、訪米団の米空軍協会（AFA）総会への参加が叶わず、これまで活発な交流の場となってきた名誉会員等との懇親会が望めない状況であったが、AFA会長も務めるライト名誉会員（Lt Gen (Ret.) Bruce A. Wright）から提案があり、日米関係者が調整を重ね、初の試みとなる本バーチャル懇親会が実現した。

AFAも米国内の状況から、総会をバーチャル・カンファレンスとすることとし、その準備が佳境となる時期であったが、米側はジョーダン退役中佐（Lt Col (Ret.) Jordan Lindeke）、日本側は荒木（淳）理事はじめ山倉理事等が綿密な調整を実施し、「日本側メンバーへの配慮」により、日本時間金曜の夕方（米国では早朝）開催とされた。

参加者は、日本側はご夫人を含め17名、米側もご夫



Participants are entering the “Waiting Room”

人を含め17名の総勢34名であった。

開始時間が近付き、懐かしい面々が会議システムに加入するにつれ、挨拶が交わされるアットホームな雰囲気の中、齊藤会長からのオープニング・リマークスにより懇親会は始まった。

齊藤会長からは、「13時間早い日本から、こんばんは。まず始めにライトさんに本会の開催にお骨折りいただき感謝を申し上げます。私にとって時差はとても厄介



Opening Remarks from  
Japan, President (Gen (Ret.))  
& Mrs. Saitoh

で、訪米の度に悩まされてきましたが、今回はリアルタイムでお会いでき、とてもありがたいことです。思い起こせば、1年前の今日は、スペース・コマンド訪問の後、コロラドからワシントンD.C.へ移動していました。今、日本では、米国もそうですが、新型コロナウイルスが蔓延し、国外への渡航はままならない状況にあります。本年のAFAカンファレンスもバーチャルなものとなるようですね。訪米し直接お会いすることは叶いませんが、この懇親会でそれを補うことができると思います。ご参加の皆さんが自由に、フランクに楽しく語り合う機会にしたいと思います。どうぞよろしく願います」との挨拶をいただいた。

続いて米側シュワルツ氏（Gen (Ret.) Norton A.

### ～ 【第59号】 目次 ～

JAAGAバーチャル懇親会	1	勲章受章「メリトリアス・サービス・メダル」	19
AFA主催バーチャル・カンファレンス	5	航空自衛隊コーナー	20
前米国防衛駐在官からの寄稿～鈴木大1佐	8	米空軍コーナー	21
太平洋空軍連絡官からの寄稿～倉地康平1佐	9	米空軍将校航空自衛隊勤務だより	22
第374空輸航空団チェンジ・オブ・コマンド	13	正会員からの投稿～荒木淳一会員（その2）	24
第35戦闘航空団チェンジ・オブ・コマンド	13	JAAGA理事の活動紹介～総務理事	29
ブラウン大将第22代空軍参謀総長就任	14	新入会員紹介	30
ウィルズバック大将太平洋空軍司令官就任	16	投稿募集のご案内	31
ブラウン大将JAAGA名誉会員に	17	会員募集	32
日米相互特技訓練	18	編集後記	32

Schwartz) から、「日本の皆さんこんばんは。米側の皆さんおはようございます。初めてのバーチャル・ミーティングを開催できることをたいへん嬉しく思います。



Opening Remarks from the U.S., Gen (Ret.) & Mrs. Schwartz

ご承知の通り、今日9月11日(以下『9.11』(“Nine Eleven”)は米国民にとって特別な日ですが、その特別な日に特別な友人とこのように集うことができたことを誇りに思います。毎年皆さんとお会いできることを楽しみにしていますが、2021年はAFAと連携して私共がJAAGA訪米団をホストします。今年はパンデミックにより、多くの人が深刻な健康被害を受け、誰もがたいへんな経験をしましたが、安倍首相を始めとする素晴らしいリーダーシップによりこの状況に耐え、より顕著になったインド太平洋地域の戦略地政学的な問題にも対応することができました。航空自衛隊と米空軍の協力関係は、多くの月日を経て、プロフェッショナル同士として結束し、特に人と人の繋がりによりたいへん強固なものとなりました。我々は共通の価値観を持ち、共に高い練度を持って訓練やオペレーションを遂行してきました。また優れたシビリアン・リーダーシップは、空軍人が遺憾なく空で働ける環境を提供してきました。制服を着た者同士はもとより、家族も含めた繋がりを大切に、皆さんとともにこの日米の繋がりを更に堅固なものとし、航空自衛隊と米空軍の素晴らしい関係が永遠に続くように見守ってまいりましょう」と挨拶をいただいた。

日米のオープニング・リマークスの後は、昨年未新たに編成された米宇宙軍(U.S. Space Force)トップの作戦部長(Chief of Space Operations)であり、多忙極まる中参加されたレイモンド大將(Gen John W. Raymond)から、8月の訪日時、「安倍首相はじめ防衛大臣、新航空幕僚長その他要職の方々との会談において、宇宙における日米の更なる協力深化が重要である旨、相互に確認した」との話をいただいた。荒木理事から「宇宙軍の階級呼称を海軍式にするという意見に対する大將の考え」を伺ったところ、「宇宙軍の兵士が仕事をする為に適切なものでなければならぬが、議会と良く連携してゆく」との



Gen Raymond, Chief of Space Operations, U.S. Space Force

回答があった。また、齊藤会長から「コロラドではゴルフの飛距離が20~30ヤード伸びるのでは」と問われ、レイモンド大將が「標高が高いので10%ほど飛距離が伸び、名プレイヤーになったように感じられますよ」と答えたところ、絶妙なタイミングでアンジェラ名誉会員(Lt Gen (Ret.) Salvatore A. Angelella)から「新たにワシントンD.C.でのゴルフ幹事になりました。皆さんのお越しを楽しみにしています」との話があった。

レイモンド大將も「来年の再会を楽しみにしている」と言葉を残し公務に向かわれた。



Lt Gen (Ret.) Angelella

続いて、荒木理事から日本側参加メンバーの紹介があり、齊藤会長ご夫妻、訪米を予定していたメンバー、本懇親会にはスライドでの参加となった杉山顧問はじめ福江理事長、平本理事ご夫妻、前原理事、荒木理事、武藤理事、井上理事、続いてシニア・メンバーの永岩名誉顧問、堀名誉顧問、岩崎顧問、山崎顧問、清藤副会長が、また広報の木村理事及び太田理事、最後に日本側の会議全般の管理運営をホストした山倉理事の順に、各人お気に入りのバーチャル背景を纏い、お気に入りの飲み物を傍らに、手を振って挨拶した。これは、時間を有効活用するために、進行上、各人からのひと言は割愛することとしたものであった。

続いて、AFAのChairman of the Boardである元空軍最先任上級曹長のマーリー氏(Chief Master Sergeant of the Air Force (Ret.) Gerald Murray)から、「1999年来日以降、空自部隊訪問等を通じて日米下士官交流を推進」されたことなどの勤務経験を、また「ご息子が日本人女性と結婚し、日本語も流ちょうに話すお孫さんもおられる」とのエピソードも交え、「日米の繋がりの強さ、その素晴らしさ」が語られた。

引き続き、これまでワシントンD.C.において、名誉会員代表として毎年訪米団のお世話をいただいたエバート名誉会員(Gen (Ret.) Ralph E. "Ed" Eberhart)から、「23年前5空軍司令官の職を離れ日本を去り、米空軍参謀副長としてワシントンで勤務していた時、デービス名誉会員(Gen (Ret.) J.B. Davis)とともに、最初のJAAGA訪米団、鈴木団長以下の皆さんをお迎えしたこ



CMSgt of the Air Force (Ret.) Gerald Murray

続き、これまでワシントンD.C.において、名誉会員代表として毎年訪米団のお世話をいただいたエバート名誉会員(Gen (Ret.) Ralph E. "Ed" Eberhart)から、「23年前5空軍司令官の職を離れ日本を去り、米空軍参謀副長としてワシントンで勤務していた時、デービス名誉会員(Gen (Ret.) J.B. Davis)とともに、最初のJAAGA訪米団、鈴木団長以下の皆さんをお迎えしたこ



Gen (Ret.) Eberhart

とが思い返されます。今年、コロラドスプリングスに引っ越しましたので、こちらでまた皆さんにお会いし、ゴルフなども一緒にできる日を楽しみにしています」との挨拶をいただいた。

その後、ライト名誉会員から、今回参加の名誉会員等の紹介と主要経歴が紹介された。

5空軍司令官・空軍教育訓練コマンド (Air Education and Training Command) 司令官を歴任されたライス名誉会員 (Gen (Ret.) Edward A. Rice Jr.)、三沢基地司令官・5空軍司令官であったアンジェラ名誉会員、三沢基地司令官・5空軍司令官・太平洋空軍司令官であったヘスター名誉会員 (Gen (Ret.) Paul V. Hester)、太平洋空軍司令官・女性初の NORAD (North American Aerospace Defense Command) ・北方軍 (USNORTHCOM : U.S. Northern Command) 司令官であったロビンソン名誉会員 (Gen (Ret.) Lori J. Robinson)、5空軍司令官であったドーラン名誉会員 (Lt Gen (Ret.) John L. Dolan)、太平洋空軍司令官であったチャンドラー名誉会員 (Gen (Ret.) Carrol H. Chandler) 及びノース名誉会員 (Gen (Ret.) Gary L. North)、南方軍司令官であったフレーザー氏 (Gen (Ret.) Douglas M. Fraser) であった。

続いて、荒木理事から、航空自衛隊における8月25日付、航空幕僚長はじめ、航空総隊司令官、航空教育集団司令官及び補給本部長の人事異動についてスライドを用い、新たな陣容について、略歴及び米軍との関わりなどを含めて説明がなされた。



Gen (Ret.) Araki introduces new leaders of Koku-Jieitai

以降は、米側はライト名誉会員、日本側は荒木理事のコンビにより、軽快に会が進行され、米側スピーカーからは『9.11』当時の状況や体験が語られ、貴重な話を伺う機会ともなった。

米側のベガート名誉会員 (Gen (Ret.) William J. Begert) からは、「19年前の『9.11』当時、マーリー氏



Gen (Ret.) Begert

は太平洋空軍と一緒に勤務し、シュワルツ氏はアラスカの11空軍司令官、エバハート氏は NORAD 司令官として、ヘスター氏は5空軍司令官として日本で勤務

しており、彼らとは素晴らしい関係にありました。また外国、とりわけ日本の皆さんとの素晴らしい関係も築けており、19年前にはたいへん大きな支援をいただくことができました。このような緊密な関係を更に強固にしていきたいと思います」との話をいただいた。

続いて JAAGA 岩崎顧問から、「『9.11』は私にとって2つの大きな意味があります。1つは大きな悲劇の日、もう1つは家内の誕生日なのです。今宵は東京から離れた場所におり、残念ながら私一人での参加となりました。新型コロナウイルス禍により、ネット・アクセスメントの会議や MSF (日米統幕長会議トラック 1.5 ; 米側議長マーレン大将 (Ret.)、日側議長岩崎空将 (Ret.)) の対面での会議が中止となり Web になり、また、JAAGA の訪米も叶わない状況ですが、しかし、本日こうして皆さんにお会いできて大変嬉しく思います」との話をいただいた。



Gen (Ret.) Iwasaki

米側ヘスター名誉会員から、「JAAGA との関わりは、三沢の航空団司令官として、エバハート 5空軍司令官と JAAGA の皆さんをお迎えし、将校クラブで懇談したことが最初でした。1990年の8月2日はイラクがクウェート

に侵攻した日ですが、PACAF 出張を終え勤務地の嘉手納に戻る途中でした。『9.11』当時は5空軍司令官であり、米本土の士官学校に出向き、太平洋の実情について講義をしていたところ、ニューヨークのビルが攻撃されました。その5日後、ベガート太平洋空軍司令官の命により派遣された KC-135 に乗り日本に戻りましたが、米国の上空には私の乗ったこの1機しか飛んでおらず、交信等もない静かなフライトであったことが強く印象に残っています。それ以降2007年に太平洋空軍司令官で退役するまでの間、日本のリーダー達ととても強い絆を築くことができました」との話をいただいた。



Gen (Ret.) Hester

続いて、チャンドラー名誉会員からは「若き戦闘機操縦者としての嘉手納勤務からの日本との関わり、それ以



Gen (Ret.) Chandler

降も航空自衛隊との素晴らしい関係を築けた」ことを、また、ノース名誉会員からは「戦闘機操縦者としての三沢勤務から、嘉手納基地司令官としての勤務、そして太平洋空軍司令官として、東日本大震災における『トモダチ作戦』を指揮したこと、『イラクの自由作戦』（OIF：Operation Iraqi Freedom）での航空自衛隊との協力、レッド・フ



Gen (Ret.) North

ラッグ・アラスカ参加の F-16 墜落時の航空自衛隊の救難支援など、日米の緊密な関係を実感してきた」ことを話され、お二方共に「この素晴らしい関係を若い世代に引き継いでもらう」ことの重要性を説かれた。

日本側からは、永岩前顧問から「『9.11』当時、航空幕僚監部の防衛部長で、2機目がビルに激突する映像を見て、速やかに特別輸送機の B-747 を羽田空港に準備し、いつでも支援できるように態勢を取った。2001年には米太平洋空軍トム・ワスコ作戦部長(後の在日米軍司令官)の主導によりバングラディッシュのダッカで極東作戦部長等会議が開催され、冷戦後における平時の空軍力の活用法、国際的な災害救助への活用などについて話し合った。また、アラスカにおいても防衛部長会議を行ったが、アラスカでの開催を要望したのは私で、1982年ルーク基地での F-15 機種転換課程の教官であったフレーザー氏が航空団司令官であったからだ。1992年第2航空団司令の時、ライト第35航空団司令官と共に、千歳の F-15×2機と三沢の F-16×2機の戦闘訓練を計画したが、長機のライト司令官は地上でアボートし、2対1の訓練となり、当然のことながら我々が勝利した。2006年航空支援集団司令官時、イラク復興支援任務のためクウェートに C-130 を派遣したが、ノース中央空軍司令官とどのように共同していくかを話し合った。2008年退官後、ハーバード大学アジアセンターのシニア・フェローとなったが、北東アジアにおいて『いかに日米の絆が強固であるか』についてライト氏に講義をお願いし、素晴らしい講義をしていただいた。2009年シュワルツ参謀総長の時、旧知のフレーザー南方軍司令官の就任式出席のためにフロリダを訪れた思い出は格別なものだ。JAAGA にとってのみならず、航空自衛隊にとって、そ



Gen (Ret.) Nagaiwa

して米空軍にとっても、我々の築き上げてきた財産、『Strong Continuous Bond of Trust』を若い世代にも未

永遠に引き継いでもらいたい」との話をいただいた。

続いて米側ロビンソン名誉会員から「太平洋空軍司令官上番直後、齊藤航空幕僚長が主催された空軍参謀長等招へい行事（ACDJ：Air Chief's Dialogue in Japan）に参加し、空幕長から要請された DEAN（首席）として、全空軍参謀長を代表して安倍総理、防衛大臣に話す機会をいただいた。空自側の素晴らしい対応に触れ、日米の友好関係が如何に強固なものかを実感した」との話があり、次いでフレーザー氏からは「永岩前顧問とは



Gen (Ret.) Robinson

1982年以来の親交があり、特に1999年ブレア太平洋軍司令官の随行で千歳基地を訪問した際の再会、2006年か2007年アラスカ軍司令官当時の日米防衛部長会議での再会、南方軍司令官指揮官就任式典への永岩前顧問の参加」などに触れ、「多くの方が親密に繋がりを持っていることは素晴らしい」との話を伺った。

また、ライス名誉会員からは、「空軍人生で最も充実していたのが日本での勤務であり、従来にはなかった日本勤務未経験の爆撃機乗りを日本に送り込んでいただいたヘスター司令官に感謝しており、日本の文化や人々、そして日米空軍種の強い絆は経験した者でなければわからない」との話が、ドーラン名誉会員からは「若かりし日の三沢勤務から、航空自衛隊の皆さんと親密な関係を持てたことに心より感謝します」との話をいただいた。

次にマルティネス名誉会員（Lt Gen (Ret.) Jerry P. Martinez）から「『9.11』の朝、国防長官とのビデオ会議において長官から『太平洋域は最も重要な AOR である』



Gen (Ret.) Fraser



Gen (Ret.) Rice Jr.



Lt Gen (Ret.) Dolan



Lt Gen (Ret.) Martinez

と発言があった。在日米軍司令官時、来日した多くの議員、産業関係者や軍高官に、中国、ロシア、北朝鮮が如何に日本の近くに存在するかをしっかりと理解させた。これまでの努力により日米同盟をベストなものに築き上げてきた皆様に感謝します」との話をいただいた。

軽妙な司会進行と興味深い話の数々で、あっという間に終了予定の時間に・・・。

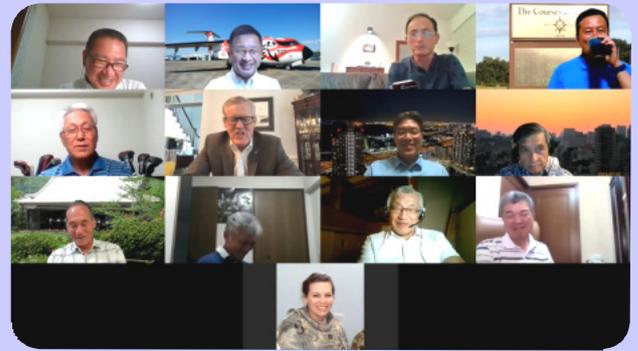
会の終わりにあたり、齊藤会長から、「皆さんから『20世紀の歴史』を興味深く拝聴しました。毎年『9.11』が来る度に、我々は犠牲になられた方々を思い出し、心からご冥福をお祈りしております。JAAGAメンバーと米国の友人、皆さんとの友情、強い絆を、共に若い世代に引き継いでまいりましょう。皆さんありがとうございました」とのお言葉があり、ライト名誉会員の「日米同盟乾杯!」のご発声により盃を空け、初のJAAGAバーチャル懇親会は幕を閉じた。

本会を通じて、リアルな懇親会には敵わないものの、バーチャルの場においても、参加者同士、お互いの表情を見ながら、ほぼリアルタイムで会話し、素晴らしい時間を共有できると感じた。また、会議ソフトの充実やPCの能力向上等、ここ数年の飛躍的なIT技術の進歩も実感した。

記事担当として参加させていただいたが、参加者相互の接点やエピソードを伺えたことに加え、9月11日と



Lt Gen (Ret.) Wright proposes the final toast, "Nichibei Domei Kampai!!!"



いう特別な日に設定されたことから『9.11』に係る実体験なども伺える貴重な機会となった。何よりも、これまでの日米双方の積み重ねてきた努力、そして素晴らしい『縁』により、空自と米空軍の間に今日の強固な『絆』が築かれてきたことを実感できた機会であった。

『Strong Continuous Bond of Trust』『強力で継続的な信頼の絆』を更に強固なものとするべく努力していきたい。

来年以降の訪米が実現することを切に祈る。

(太田理事記)

訪米行事  
に代えて

## 米空軍協会 (Air Force Association : AFA) 主催 バーチャル・カンファレンス(Air, Space & Cyber : V-ASC2020) 参加報告 (概要)

JAAGA Members participated in AFA Virtual Conference, 14-16 Sept. 2020

### 1 全般

つばさ会及びJAAGA両団体の代表団の米国派遣が開始されてから、今年で通算22回目の訪米となるはずであったが、コロナ・パンデミックの影響により、AFAカンファレンス参加並びに名誉会員との交流行事をバーチャル(テレビ会議、ビデオ・オンデマンド視聴)で行うこととなった。

在米のJAAGA名誉会員等との交流行事は、AFA会長でもあるライト元中將のリーダーシップにより、カンファレンス直前ではあったものの、9月11日にテレビ会議方式で実施することができた。JAAGA名誉会員との交流・親睦の機会を途絶えさせることなく継続できたことは大きな成果であった。

AFAカンファレンスは、バーチャル形式の会費制であったことから、一部の会員のみ参加となったが、バー

チャルASC2020カンファレンスに参加し、主要幹部のリマークスやパネル・ディスカッションを視聴できたことは、米空軍や新たに独立した米宇宙軍に関わる最新情報入手すると共に中露との「大国間競争」に大きく舵を切った米空軍の変革の方向性を理解する上で大きな意義があったものとする。



### 2 バーチャルASC2020カンファレンスの概要

#### (1) 期間

令和2年9月14日(月)～16日(水)

(2) 構成

【主要幹部によるスピーチ】

当該期間中の午前中に行われた各主要幹部のスピーチは、そのまま計画された時間に生でライブ配信され、所要の編集の後、サイト上で録画配信された。

【パネルディスカッション】

主要テーマを議論するパネル・ディスカッションは、事前に撮影されたものが、同様にサイト上で録画配信されていた。

【特別スピーチ】

上記以外にもスポンサー会社後援で軍事産業主要幹部や企業所属の専門家（退役軍人等）のスピーチやコマercial動画も配信されていた。主として米空軍、米宇宙軍の主要装備品の開発や配備に関する現状等の説明であった。

【装備品等展示】

例年より若干少ない 81 社が、装備品等に関するバー

チャルでの展示を行っていた。展示内容は、会社によって大きく異なり、3次元のバーチャルなブースを設ける企業、動画を多数展示する企業、HP 形式のみの企業など様々であった。準備期間、出展の条件等から会社の資金力、バーチャル技術力による差が出たものと考えられる。

【優秀下士官表彰】

AFA 年度総会の一部として例年実施される最優秀下士官の表彰は、12 名の該当者の略歴と短い自己紹介の動画がサイト上に掲載されると共に彼らの業績が讃えられていた。

【その他】

オンデマンドの配信動画並びにサイトへのアクセスは年末 12 月 31 日まで可能となっており、何度も視聴、確認が可能となっている。

(3) 内容等

【主要幹部のリマークス等】：8 件



Remarks by Secretary of the Air Force, B. Barret, Gen Brown, Gen Raymond, Assistant Secretary of the Air Force, Dr. W. Roper, Secretary of Defense, M. Esper (from left)

- トランプ大統領の歓迎の挨拶(9/14)
- バレット空軍長官のスピーチ(9/14)
- 第 22 代米空軍参謀総長ブラウン大将のスピーチ(9/14)
- 初代米宇宙軍作戦部長レイモンド大将のスピーチ(9/15)
- ローパー空軍長官補のスピーチ(9/15)
- エスパー国防長官のスピーチ(9/16)
- 米空軍最先任上級曹長バス最上級曹長のスピーチ(9/16)
- 米宇宙軍前任下士官、トゥーバーマン最上級曹長のスピーチ(9/15)

- 【パネル・ディスカッション(演題のみ)】：17 セッション
- ミッチェル研究所「スタンドイン/スタンドアウト能力の適切な比率」(9/14)
- 「家族にとっての新たな日常作戦」(9/14)
- 「米宇宙軍の要求に民間企業はどう適合させるか」(9/14)
- ミッチェル研究所「戦力構成の設計に対する効果重視型アプローチ」(9/14)
- 「調達の施策と実践：スタートアップ企業と投資を受け入れる DOD の調達プロセスに関する議論」(9/14)
- 「競争優位の維持：2030 年に向けたビジョン」(9/14)



2030 Vision by Under Secretary of Defense, M. Donovan



Several Panel Discussions were held



- 「偉大な宇宙のリーダー達：宇宙における戦いに勝つ」(9/15)
- 「情報戦争 (IW)」(9/15)
- 「将来の基地」(9/15)
- 「JADC2：統合全領域指揮・統制」(9/15)
- 「小企業のセッション」(9/15)
- 「新たな日常作戦：対 COVID-19」(9/16)
- 「空軍における多様性と人種問題」(9/16)
- 「今日と明日の宇宙戦力」(9/16)
- 「文化の衝突と才能の管理」(9/16)
- 「新たなデジタル経験」(9/16)
- ミッチェル研究所「米空軍は適切な予算配分を受けているか：予算の透明性」(9/16)

【その他】：5セッション

- 「戦略空輸：地球規模の挑戦」
- 「ロッキードマーチン社後援インタビュー グレグ・アルマー」(F-35 関連)
- 「エルビット・アメリカ社後援インタビュー 退役准将 ボブ・エドモンド」(スタートアップ企業関連)
- 「ボーイング社後援インタビュー リアン・カレット女史」(T-7、KC-46 関連)
- 「CASI 社後援インタビュー 退役少将 ダリー・バーク」(データ、IT ソリューション関連)

### 3 成果の概要

(1) 新たに独立した米宇宙軍と米空軍が空軍省隷下の姉妹軍種として揃って参加する初めてのシンポジウムとなった。コロナ・パンデミックの影響と米国内で発生した人種問題を受けて、シンポジウムの約 1/3 はそれらに関連する内容のスピーチやパネルであった。また、シンポジウムそのものがバーチャルでの開催となったため、昨年のように数千名の参加者、関係者がワシントン郊外のゲイロード・ホテル内の会場で一堂に会することによる熱気と興奮は無かったものの、米空軍/米宇宙軍の最新の状況や課題等に関する興味深い議論がなされていた。主催する AFA も 6 月頃にバーチャル開催を決めた後の短い期間で、重要なトピックスに関するパネル・ディスカッションの設定や装備品等展示を含むバーチャルとは言い質の高いシンポジウムを開催したことは、AFA の高い企画力、実行力を示すものであると言える。

(2) 本年のシンポジウムの関心事項の一つは、8 月に第 22 代空軍参謀総長に就任したばかりのブラウン大將及び新たな軍種として立ち上がり体制移行の途上にある米宇宙軍作戦部長レイモンド大將のスピーチであった。特にブラウン大將は、AFA のシンポジウム直前に自らの所信表明とも言える白書「変化を加速させるか、負けるか (ACOL: Accelerate Change Or Loose)」を出しており、注目度が高かった。レイモンド大將は、米宇宙

軍の体制移行の進捗状況を詳細に説明する中で、米宇宙軍はデジタル工学を基本とする「デジタル・フォース (デジタル戦力)」を目指すことを表明するなど、インパクトの強いスピーチであった。これ以外の主要幹部のリマークスも、デジタル工学による装備品の開発、調達迅速化、IoMT (Internet of Military Things) の実現による競争優位性の獲得、商用技術の積極活用等、様々な分野における変革を推進することによって大國間競争に勝利するという方向性は共通するものであった。

(3) 昨年訪米時に感じた米空軍内の脅威認識 (当面はロシア、中長期的には中国) に関する微かな違和感は全く感じられなかった。「NDS2018」で表明された「中露との大國間競争」を如何に戦い、抑止し、勝利するか、その最大の対象は中国であるとの考え方が DOD、空軍省全体に徹底されている印象を受けた。特に、抑止が破綻した後のハイエンドの戦いにも勝利する為の作戦構想として、米空軍が主導する統合全領域作戦 (JADO: Joint All Domain Operation) を追求するという姿勢がより明確になっていた。また、大國間競争に勝つためには、従来のやり方、考え方を変えなければならないという点は、主要幹部、現役のパネラーにも共有されていた。ブラウン大將が自らの白書「ACOL」で表明した変化の加速が不可欠との認識は、圧倒的であった米軍の優位性が大國からの挑戦により失われつつある現状に対する焦燥感 (Sense of Urgency) の表れとも言える。

(4) 大國間競争におけるハイエンドの戦いをも抑止、勝利する為には、空軍省全体で様々な改革がスピード感をもって進められていることを実感できた。特に宇宙領域における変革は、昨年からの宇宙コマンドの戦闘コマンド化、宇宙軍の独立等、我々の想像を超える速度で進捗している。また、宇宙軍の独立を契機としつつ米空軍も様々な分野での改革を推進している。その核心となる作戦概念は、ゴールドフィン前参謀総長が主導してきた JADO である。その為の指揮統制系統 (JADC2) の確立とその判断等を支援する先進戦闘管理システム (Advanced Battle Management System: ABMS) の整備を進めるために「On Rump」実験と呼ばれるフィールド実験が進められていることが理解できた。また、装備品の開発から配備までを迅速化するためにデジタル工学の活用や、スタートアップ企業との連携の強化、デジタル・ネイティブで優秀な人材の確保・育成等にも改革の焦点が当てられている。これらは、正に緒に就いたばかりであり、今後の進展には紆余曲折が予想されるが、実効的な日米共同対処態勢の確立の為には、このような米空軍/米宇宙軍における動向をフォローアップすると共に、空自における所要の検討を先行的に進めることが極めて重要である。

(荒木 (淳) 理事記)

## 寄稿

## 「米国ワシントン D.C.から見た JAAGA の活動」

前 在米国日本国大使館 防衛駐在官 1等空佐 鈴木 大  
Letter from Col Suzuki, Dai, former Defence Attaché to the U.S.

今回 JAAGA だよりへの寄稿の機会を頂き、大変光栄に思います。

私は 2017 年 6 月から 2020 年 8 月までの間、米国ワシントン D.C.に所在する日本国大使館で防衛駐在官として勤務しておりました。残念ながらこれまで JAAGA との接点はなく、正直具体的な活動内容も存じ上げておりませんでした。JAAGA による訪米等を通じて、JAAGA の設立趣旨や活動内容について理解させて頂いたところです。防衛駐在官として勤務していた期間中、JAAGA による訪米が 3 回計画され、依頼に基づき、米統合参謀本部、空軍参謀本部及び米軍基地への訪問や高官との意見交換等に関し、米側と諸調整をさせて頂きました。防衛駐在官の立場として、これらの調整や意見交換等の場を通じ、米軍現役高官のみならず、元空軍参謀総長や元在日米軍司令官と交流する等、貴重な機会となりました。

### 【日米バーチャル・イベント】

日本への帰国が迫った本年 8 月、元在日米軍司令官のライト退役中将（現在、米空軍協会（AFA）会長）から相談したいことがあるとの連絡を受けました。ライト退役中将は、2020 年度の JAAGA 訪米がコロナ禍の影響で中止となったことを非常に残念であると思われ、航空自衛隊と米空軍が良好な関係を維持していく為にも、定期的なコミュニケーションが重要であり、コロナ禍であるが JAAGA と何らかのイベントができないかとの強い思いをもっておられました。最終的にオンラインでの日米バーチャル・イベントを実施できればとの結論となり、ライト退役中将や元空軍参謀総長シュワルツ退役大将と何度かやり取りさせて頂いた後、JAAGA にご連絡しました。本年 9 月 11 日に JAAGA と名誉会員との間で、

バーチャル・イベントが開催されると伺っておりますが、日米双方にとって、貴重な機会となったのであれば大変嬉しく思います。

### 【日米の信頼関係】

ある先輩から日米関係に関し「政府と政府の関係も大切であるが、国と国の関係は、つまるところ『個人と個人の関係の総まとめ』であり、日米の信頼関係も同様である」と教わったことがあります。日米間の信頼は、個人と個人の信頼の積み上げであり、それが集まり国家間の信頼となると。徐々に世代交代していく中で、如何に理解者を得て、信頼を構築・維持していくか、これらを継続することが極めて大切であると感じています。名誉会員からは、JAAGA による諸活動は、日米の信頼関係の構築・維持に資するものであり、現役の後輩達に繋げていきたいとの発言を伺う機会が何度もありました。

### 【JAAGA の活動成果】

米国において、在日米軍で勤務経験のある軍人等の多くの方々は、日本に対して好意を持っておられ、「当時の生活が懐かしく、日本にまた行きたい」との声を多数伺いました。良好な日米関係を維持、更に深化させる観点から、在日米軍経験者は、日本にとって大きな財産となっています。一方、日本との接点を維持することは簡単ではありません。在米国日本国大使館では、様々なイベントを計画し、その機会を作為することに努力を傾注して参りました。以下の写真のとおり、空軍長官、宇宙軍作戦部長、元 PACAF 司令官、元在日米軍司令官等、多くの高官等に参加していただきました。その中でも JAAGA 名誉会員の参加者が多く、JAAGA による訪米等を通じ、その繋がりがしっかりと維持されています。

（鈴木 1 佐：現 空幕防衛課防衛調整官）



Col & Mrs. Suzuki with Gen Raymond, Chief of Space Operations, U.S. Space Force, at the 2020 Reception of Emperor's Birthday

Japan-U.S. Event, 2018  
Gen (Ret.) Carlisle, Col & Mrs. Suzuki, Mrs. Wright, Secretary of the Air Force & Mr. Wilson, Lt Gen (Ret.) Angelella, and Lt Gen (Ret.) Wright (from left)  
Each retired General is Honorary Member of JAAGA

## 寄稿

# 「米太平洋空軍司令部連絡官勤務について」

米太平洋空軍司令部連絡官 1等空佐 倉地 康平  
Letter from Col Kurachi, Kohei, Liaison Officer, PACAF

## 1 はじめに

Aloha!

米太平洋空軍 (PACAF) 司令部にて連絡官として勤務している倉地 1 佐です。この度 JAAGA だよりへの寄稿という貴重な機会を頂きましたので、簡単ではありますがこちらでの勤務状況等を紹介させていただきます。

私は、2018 年 8 月に航空幕僚監部運用支援課から米国ハワイ州の PACAF 司令部に派遣され、国際交流等を担当する A5I に所属しております。PACAF 司令部は、ハワイ州オアフ島にあるヒッカム空軍基地内に所在しています。ヒッカム空軍基地は、現在はパールハーバー海軍基地と統合され JBPHH (Joint Base Pearl Harbor - Hickam) として海軍に管理されており、ここからインド太平洋全域における作戦を指揮しています。

私のほか、PACAF には航空総隊より 3 名の連絡官が、情報、運用及び通信・サイバーのそれぞれの部署に派遣



Hickam Air Force Base

され、連絡調整業務を実施しています。この他、交換幹部として 1 名の通信幹部が PACAF 隷下の通信隊に派遣されており、合計 5 名の幹部がヒッカム空軍基地にて勤務しています。

## 2 PACAF について

PACAF の担任区域 (AOR: Area of Responsibility) には、インド洋から太平洋全域、北極圏から南極までが含まれており、実に地球上の 50% 以上の地表が含まれています。さらに、世界の 50% 以上の人口を抱え、世界で 10 番に入る大きな軍隊のうち 7 つ及び核保有国の 5 つがこの地域に所在、最も混み合ったシーレーンが所在しているなど、地理的にも軍事的にも重要な地域となっています。

このような重要な地域であるインド太平洋域を統合するのが米インド太平洋軍 (USINDOPACOM: US Indo-Pacific Command) であり、その司令部もハワイに所在します。さらに米太平洋陸軍 (USARPAC: US Army Pacific)、米太平洋艦隊 (PACFLT: Pacific Fleet)、米太平洋海兵隊 (MARFORPAC: Marine Corps Forces Pacific) の全ての軍種の司令部もハワイに所在しており、

ハワイは米軍にとってインド太平洋域における作戦を実施する上での要所となっています。

PACAF の主要な基地は、日本、韓国、アラスカ、グアム及びハワイに所在します。なかでも日本の第 5 空軍、韓国の第 7 空軍及びアラスカの第 11 空軍は PACAF の主力部隊です。これらの基地からインド太平洋全域での活動を実施しています。

## 3 連絡官業務

## (1) 任務、演習及び訓練に関する調整

連絡官は、日米共同で実施する任務、演習及び訓練に関して PACAF 司令部のスタッフと直接調整しています。日米共同統合演習においては、連絡官として実際に演習に参加し、空自からの連絡要員として PACAF との各種調整を実施します。北朝鮮からのミサイル発射時の対応など、実際の任務の場においても、PACAF 司令部と直接情報交換及び調整を行います。

## (2) 会議等調整・参加

PACAF 司令部と空幕との間では、日米空軍種間の連

携のため多くの会議を実施しています。また、航空総隊及び航空支援集団とも作戦運用、演習及び訓練のため多くの会議を実施しています。

これら PACAF との間で実施さ

れる会議等の事前調整及び会議への参加も連絡官の業務です。また、空自に限らず、統幕、内局及び外務省等からも PACAF を訪問されることが多々あり、これらの訪問者の対応も併せて実施しています。COVID-19 以前では平均して月に

2~3 組の出張者等がハワイを訪問し、会議等に参加していました。これらの訪問者を迎え入れ、会議参加等



With Japan Delegation at the Courtyard of Hero in HQ PACAF



With Former MINDEF Iwaya and Hawaii LNOs



With Gen Marumo, former Chief of Staff

を支援し、送り出しております。場合によっては、日本で実施される会議に参加することもあります。

大佐級以上で実施される会議

については、SLE (Senior Leader Engagement) 又は KLE (Key Leader Engagement) という位置づけとなり、PACAF では戦略的発信 (Strategic Communication) の観点からも重要視しています。特に、2 年毎に PACAF 主催により実施される PACS (Pacific Air Chief Symposium) は、20 か国以上の空軍参謀長等が集まる大きな会議であり、PACAF のスタッフと共に周到に事前準備をし、空幕長の参加を支援させて頂くのは最も重要な業務の一つです。

### (3) 国際交流等

PACAF 司令部には、日本の連絡官に加えてオーストラリア、韓国及びシンガポールの連絡官が同様に勤務しております。INDOPACOM 司令部には、さらにイギリス、カナダ、ニュージーランド、フランス及びフィリピン等から連絡官が派遣されており、他の在ハワイの各軍



LNOs to PACAF from Korea, Australia, Singapore and Japan

司令部にもそれぞれ連絡官が派遣されています。これらの連絡官同士の交流を持つことにより、相互の情報交換及び信頼関係構築に努めています。

加えて、2020 年度からは、連絡官の新たな任務として太平洋地域の国々との国際交流を担うことが加わりました。これは、ハワイから太平洋地域の各国に PACAF で勤務する連絡官を派遣し、交流をしていこうというものです。残念ながら、COVID-19 の影響を受け、実際にはまだ動くことはできておりませんが、今後積極的に機会を模索していくこととなります。

### 4 PACAF と空自との関係強化

これまででも、PACAF と空自の間では各種演習及び訓練等を通じて強固な協力関係を築いてきました。さらに、こちらでは年々空自に対する期待が高まっていることを感じます。例えば、F-35 に関しては、日本はイン

ド太平洋域において米国に次ぐ最大の保有国となる見込みです。また、日米間ではミサイル防衛に関して緊密な連携を長く続けてきていることから、米軍がすすめる IAMD (Integrated Air and Missile Defense) の分野において、日本ほど米国と連携できる国は他に有りません。航空総隊司令部 と PACAF の 613AOC (Air Operation Center) との間の

連携も充実の一途です。将来的に、これらの活動を支え得る宇宙やサイバー領域においても、空自の活動への期待が高まっています。このように、PACAF と空自との協力

関係は、太平洋域における多国間の取り組みの基礎となりつつあります。

一方で、PACAF はインド太平洋地域の安全保障環境を見据えて様々な国との交流を積極的に図っています。この点においては、日本は重要なパートナーであるとはいえ、数ある国の一つにすぎません。空自も PACAF と協力しつつ、また日本だからこそできるインド太平洋地域の国との協力関係を構築し、FOIP (Free and Open Indo-Pacific) 実現のための努力を続けることが、日本周辺のみならず、インド太平洋域全体の安全保障のために必要であることを強く感じています。

### 5 PACAF 司令官との勤務

私が着任後の 2 年間は、ブラウン司令官の下で勤務させて頂きました。ブラウン司令官の日本に対する姿勢は、1 年目と 2 年目とでは大きく異なっていた印象を持ちました。着任後の日本に対する姿勢は、どちらかという

と慎重に、という印象でした。1 年目の後半から 2 年目には、日本を重要なパートナーとして強く認識して下さっていることを、空自との各種イベントへの対応の中で感じました。JAAGA 訪問団との交流、空幕長及び総隊司令官の PACAF 訪問、PACAF 司令官の日本訪問時の交流、並びにホノルル総領事による表敬等、1 年の間



LOM(Legion of Merit) award ceremony for Gen Marumo, former Chief of Staff in HQ, PACAF



With Gen Brown, former Commander, PACAF at Air Force Ball

に PACAF 司令官との間でこれほど多くの交流を持っている国は少ないようです。また、司令官の日本への対応の変化は PACAF のスタッフの仕事にも変化を与えており、この 2 年間で空自への対応が明らかに変わってきていることを感じています。ブラウン司令官が空軍参謀総長になられたことにより、更に期待が高まります。

本年 7 月にはウィルズバック司令官が着任されました。ウィルズバック司令官は 2 度の日本での勤務経験をお持ちであり、既に日本をよく理解して下さっています。司令官としての最初の訪問国は必ず日本にする、と着任早々明言されており、心強く感じました。残念ながら 11 月に計画された日本訪問はバーチャルへと変更となりましたが、随所で在日米軍のホスト国としての日本に対する感謝の言葉を頂いております。

## 6 JAAGA 訪米団支援

2018 年及び 2019 年と 2 年間、JAAGA 訪米団の皆様への来訪支援をさせて頂きました。過去実際にお仕えた数多くの大先輩方を前に私が尻込みしかけているところ、PACAF のスタッフたちは皆、JAAGA の皆様の受け入れに最大限の努力を払ってくれました。特に、私の勤務部署、A5I 及びプロトコール・オフィスのスタッフたちは JAAGA 訪米団の重要性を強く認識してくれており、極めて協力的な姿勢であったことに感謝しております。2019 年の訪問時には、オアフ島の隣のカウアイ島にある PMRF (Pacific Missile Range Facility) を訪問し、イーグス・アショアを見学させて頂きました。この際も、隣島までの移動、米海軍が管理する PMRF への立ち入り調整及び MDA (Missile Defense Agency) が管理するイーグス・アショアへの研修調整を、他基地かつ PACAF とは別組織に対する調整でありながら、スタッフがとても積極的に調整し、円滑に研修頂けるよう手配してくれました。

このように JAAGA 訪米団の皆様や空自からの訪問者を対応することで、連絡官と PACAF のスタッフとの連携を強化させるだけではなく、新たな関係を築くことができ、我々にとっても貴重な機会でありました。2020 年の訪問が COVID-19 の影響で中止となりましたことが本当に残念です。



JAAGA members and Former CONGEN Ito after the dinner party at residence of CONGEN



With Great senior, Retired Gen Iwasaki

## 7 ハワイと日本

### (1) ハワイと日本人

さて、ハワイというと青い海と空に囲まれた常夏の楽園、というイメージをお持ちの方が多く、日本人にも人気の旅行地です。ここで、意外に知られていないハワイと日本との関係を簡単に紹介します。

時代は幕末の頃にさかのぼり、当時のハワイ王国が江戸幕府に対し労働力確保のため移民の協力を依頼し、その後明治維新の混乱の中、日本からハワイへの最初



Gannenmono Celebrating 150 years

の移民が到着したのが、今から 152 年前の 1868 年 (明治元年) でした。150 名の初めての日系移民は「元年者」と呼ばれ、今も日系人のルーツとして大事な存在です。1881 年には当時のハワイ国王が訪日し、西欧からの脅威をふまえ、日本との連携強化、ハワイ王女と皇室との縁談、そして日本からのさらなる移民増加等を提案しています。当時の日本政府はアメリカとの対立を避けるため、移民増加を除き、これを断っています。この後日本からの移民は増え続け、20 世紀初期にはハワイの全人口の約 4 割が日系移民で占められておりました。このちに生じた真珠湾攻撃に続く太平洋戦争において、ハワイの日系人は敵性外国人として扱われ、大変苦勞されたと聞いています。今では日系人は 2 割を切る程度の人口となりましたが、ハワイを訪れる外国人は日本人が最も多く、2019 年には 150 万人を超える観光客が日本から訪れています。

このようにハワイの歴史の裏にある多くの日系人の努力によって、ハワイは日本にとって最も親しみやすい場所の一つとなっています。また、多くの日系人が政治、経済の分野で活躍しています。現在、ホノルル空港の名前にもなっている故ダニエル・K・イノウエ上院議員、現ハワイ州知事のデービッド・イゲ知事などはその代表といえます。



With Governor of the State of Hawaii, David Y. Ige

### (2) 在ホノルル日本総領事

在ホノルル日本総領事館は、ハワイがまだ米国になる前のハワイ王国の頃から存在しており、ハワイにおける初めての外国の総領事館ということです。同じ日本の国を代表してハワイで勤務するものとして我々連絡官を受



Office call, with CONGEN Aoki



Col & Mrs. Kurachi with Former CONGEN Ito at Emperor's Birthday Reception

け入れて下さっており、総領事館での各種公式行事にもお招きいただいております。ハワイには米軍の全ての軍種の太平洋域における司令部が所在することから、総領事はしばしば各司令官を表敬され、直接司令官と意見交換をされております。このように、米軍とも良好な関係を築いて下さっていることから、領事館で主催する行事にも米軍の各司令官等をお招きくださり、米軍の関係強化のため重要な機会を設けてくれています。



Joint memorial ceremony for the 78th anniversary of Pearl Harbor

また、真珠湾攻撃 75 周年であった 2016 年からは、日米共催により真珠湾攻撃で亡くなった日米双方の戦没者を双方が慰霊する追悼式典を開催しています。

### (3) 日系人との交流

ハワイには多くの日本人が訪問、駐在するだけでなく、多くの日系人が暮らしております。このため、ハワイには多くの日系人会等が存在しており、そのいくつかの会にもホノルル総領事館を通じてお招きいただき、交流させていただいております。ハワイで外国人として暮らす連絡官及びその家族にとって、日系人及び日本から派遣されている方々との交流は、心の支えになる有り難いものです。

### 8 ハワイの現状

2020 年 3 月、ハワイにも COVID-19 の影響が現れ始め、3 月下旬にハワイ州はロックダウンの指示である、「Stay Home Order」を発出しました。ハワイ州以外からの旅行者に対して 2 週間の隔離義務を科すとともに、ハワイ州の住民は生活に必要なものを購入等必要不可欠な場合を除いて、基本的に外出禁止となりました。多くのホテルやレストランは休業を余儀なくされ、観光で成り立っているハワイの経済は大きな打撃を受けるこ

ととなりました。世界的にも有名なワイキキ、アラモアナといった観光地からは人影が消え、著名なレストランやホテルも休業、若しくは閉店が後を絶ちません。6 月にロックダウンが解除された後、7 月を境に急激にハワイ州内の COVID-19 感染者が増え始め、8 月下旬には 2 度目のロックダウンが発令され、ようやく 9 月末に解除されることとなりました。

最近になり、10 月半ばには州外からの旅行者に対して事前の PCR 検査による陰性証明を提示することにより、2 週間の隔離義務が免除されることとなりました。ようやく 10 月半ばにして、観光業の再開の兆しが見えてきたところです。加えて、日本からの旅行者に対しても特定機関の検査による陰性証明提示で隔離義務が免除されることとなりました。

3 月末にロックダウンされ、4 月半ばに日本との直行便が途絶えた以降、すでに半年以上日本人観光客の姿は見えず、日本からの出張者も受け入れられず、何とも寂しい時間を過ごしましたが、徐々に元通りの姿に戻ってくれることを、ハワイ現地の皆様と共に期待しています。

### 9 おわりに

現在、世界は COVID-19 の猛威により大きな影響を受けている最中です。多くのことが変更を余儀なくされています。直接対面で出来た会議はバーチャルになり、海外での訓練参加も難しい状況が続きます。連絡官にとっても、対面でいろいろな方との人脈を広げたいところが、思うように会うことが出来ず、もどかしい状況です。しかし、このような時だからこそ、我々連絡官が現地にて直接調整しなければならないことも多く、改めてその任務の重要性を認識しているところです。

私のこちらでの勤務も長くはありませんが、無事に帰国するまで、連絡官としてできることを全うしたいと思っています。また日本で元気にお目に掛かれる日を楽しみにしています。

Mahalo!



Empty Waikiki beach during lock down

## 米空軍 航空団司令官 チェンジ・オブ・コマンド Wing Commander Change of Command at Yokota AB and Misawa AB

### 第 374 空輸航空団 374th ALW

6月22日(月)、横田基地において在日米軍司令官兼第5空軍司令官シュナイダー中将(Lt Gen Kevin B. Schneider)の執行により、第374空輸航空団司令官(兼横田基地司令官)交代式(374th ALW Change of Command)が行われ、ジョーンズ大佐(Col Otis C. Jones)からキャンベル大佐(Col Andrew J. Campbell)に指揮権が継承された。

キャンベル大佐は、これまでにアフガニスタン・バグラム基地第455航空遠征航空団副司令官、アメリカ欧州軍司令部戦略部門副部長、また横田基地の第36飛行隊長を歴任した。

格納庫内の会場には、日米両国国旗が掲げられたステージを前にして、限られたゲストがソーシャル・ディスタンスをとって参加した。まずシュナイダー中将が待ウォリアーである隊員のこの2年間の活躍に触れ、その強靱性と即応性を讃えた。その後、新司令官キャンベル大佐は、日本語の「団結」は連帯感と友情を表すと紹介した後、横田基地をいつも特別な存在にしてきた「団結」の感覚をもって、さらに精強化する旨の決意を表明した。

また、司令官交替に伴い、374ALW 司令官指定機のコクピット下に記される氏名もジョーンズ大佐からキャンベル大佐へ張り替えられた。

(米軍横田基地 HP 参照、浅井理事記)

(<https://www.yokota.af.mil/News/Article-Display/Article/2227082/col-campbell-assumes-command-of-the-374thaw>)



Col Andrew J. Campbell, Commander, 374th Airlift Wing, Yokota AB



Col Campbell salutes Lt Gen Schneider



Senior Airman unveils Col Campbell's name on the Yokota Air Base's flagship aircraft

### 第 35 戦闘航空団 35th FW



Col Jesse J. Friedel, Commander, 35th Fighter Wing, Misawa AB

7月13日、米空軍三沢基地において第5空軍司令官シュナイダー中将(Lt Gen Kevin B. Schneider)を執行官として、ストルーヴィ大佐(Col Kristopher W. Struve)からフリーデル大佐(Col Jesse J. Friedel)への第35戦闘航空団司令官(兼米空軍三沢基地司令官)の交代式「Change of Command」が執行された。

同式典は、米軍三沢基地949格納庫で挙行政され、在三沢米空軍・海軍関係者、空自所在部隊長等及び自衛隊関係者、近隣の市町村長等が招待された。新型コロナ禍の中での式典であり、前月から同基地内でも新型コロナ感染者が発生していたこともあり、ソーシャル・ディスタンスを取ったりマスクを装着する等の対策を厳格に施して、整齐と実施された。

当日参加したJAAGA三沢支部丸山支部長と山本事務局長によれば、式典において指揮官旗の移行の後、シュナイダー中将のスピーチにおいて、ストルーヴィ大佐のこれまでのリーダーシップ、部隊の精強化、地域社会への貢献等が披露され、その功績に対する表彰も行われたとのことである。そして、ストルーヴィ大佐の英語、日本語による日本への愛が伝わる辞任のスピーチの後に、フリーデル大佐の今後の任務遂行に対する熱意ある決意

表明等があったとのこととで、全体的に厳かな雰囲気の中で粛々と式典が行われたとのことであった。(池田理事記)



The ceremony was administered by Lt Gen Schneider, and was held solemnly while taking a social distance



## ブラウン大將 第22代米空軍参謀総長に就任

Gen Brown formally installed as 22nd Air Force Chief of Staff on 6 Aug. 2020

8月6日 メリーランド州のアンドリュース統合基地 (Joint Base Andrews, Md.) において、エスパー国防長官 (Mark Esper, Defense Secretary)、バレット空軍長官 (Barbara Barrett, Department of the Air Force Secretary)、ミリー統合参謀本部議長 (Gen Mark A. Milley, Chairman of the Joint Chiefs of Staff) 参列のもと、米空軍参謀総長責任転移 (Transfer of Responsibility) の式典が行われ、ブラウン大將 (Gen Charles Q. Brown, Jr.) がアフリカ系アメリカ人初の軍種最高位の将校として、第21代米空軍参謀総長ゴールドフィン大將 (Gen David L. Goldfein) から責任を受け継ぎ、第22代米空軍参謀総長に就任した。

太平洋空軍 (PACAF) 司令官であったブラウン大將は、彼の業績とゴールドフィン大將の37年間の空軍勤務と空軍参謀総長としての4年間を称えた厳粛でソーシャルディスタンスをとった90分間の式典を以て、新たな任務に昇格した。

また、ゴールドフィン大將に対しエスパー国防長官から Defense Distinguished Service Medal と Department of Defense Distinguished Public Service Award が授与された。

ゴールドフィン大將とそれ以前の人たちと同様に、ブラウン大將は空軍参謀総長として、いつ如何なるミッションも達成するために空軍を訓練し、態勢と装備を確保する責任を有する。更に、彼は、何十年にも及ぶテロとの戦い・封じ込めの優先から大国間の競争という新たな時代への移行の手綱を取ることになる。その新たな焦点の役割として、ロシアと中国からの挑戦に対し向かい合い、思いとどませ、必要な場合は打ち負かすために、空軍と全ての米軍は、訓練され、態勢を保持し、適切に装備されなければならない。北朝鮮の挑戦の高まりや他のアジアにおける地政学的シフトに対しても然りである。



Secretary of the Air Force Barrett administers the oath of office to incoming Air Force Chief of Staff Gen Brown



Gen Charles Q. Brown, Jr.,  
the 22nd Chief of Staff of the U.S. Air Force

### 【エスパー国防長官】

「デイブ (Dave = ゴールドフィン大將)、貴方の強力なリーダーシップと空軍のコア・バリューである integrity、service、excellence、each and every day を支持する確固たるコミットメントによって、我々の兵士達は今日の環境にうまく対応している。貴方のおかげで米国はより安全になっている。我々の偉大なる国家に貴方の人生を捧げてくれてありがとう」

「ブラウン大將は、35年余の軍歴における卓越した専門的見識の深さと経験をもっており、空軍参謀総長として非常に適任である。あなたが空軍をより高みに導くと確信しており、あなたの手腕に大いに期待している」

### 【バレット空軍長官】

ゴールドフィン大將の貢献と業績に同様の賞賛を送るとともに、ブラウン大將に対しては、他の人と同様に、空軍をより明るく優勢な未来へと導くために、経験と気質を的確に組み合わせると確信している、と述べた。

「ブラウン大將は、豊富な統合リーダーシップの経験とグローバルな観点を、第22代空軍参謀総長の役割に活かしてくれるだろう。空軍のコア・バリューである integrity、service before self、excellence を、我々が行うあらゆる面において具現化してくれるだろう。ブラウン大將は、米空軍を間違いなく率いてくれる気質、経験、大局観を備えている」



Gen Brown speaks during the ceremony with a backdrop of a gleaming chrome-plated P-51 Mustang, a fifth-generation F-35 Lightning II and a HH-60G Pave Hawk helicopter

【ブラウン大將】

正式な責任転移式の後で、ブラウン大將は、彼の人生に影響を与えた人々に謝意を表した。その中には、シャレーン (Sharene) 夫人、両親、ゴールドフィン大將や他の並外れたリーダー達を含む空軍の同僚の名があった。

「今日があるのは私や多くの者を鼓舞してくれたタスキギー航空士 (Tuskegee Airmen)、デービス大將 (Gen (Ret.) Benjamin O. Davis Jr.)、ジェームス大將 (Gen (Ret.) Chappie James)、米空軍・米軍におけるアフリカ系アメリカ人等の先輩・同僚諸氏の忍耐のおかげであり、その中には本日の特別ゲストである米国史上初のアフリカ系アメリカ人宇宙飛行士候補者であるエド・ドゥワイト (Ed Dwight) も含まれる。私が本日、米空軍参謀総長として皆さんに挨拶出来るのは、彼らが障壁を打ち砕くために重ねてきた苦難のおかげである」

挨拶の中でブラウン大將は、ゴールドフィン大將の業績を基に積み上げながら、空軍が世界中で最も先進的、プロフェッショナル、かつ破壊力があることを保証する彼独自の足跡を付け加えていく、と話した。

「私は、今日の挑戦に取り組みながら、よりよく対抗し、抑止し、勝利出来るよう、将来に備えることを約束する」輝くクロームメッキの P-51 ムスタング、第 5 世代 F-35 ライトニング II、HH-60G ペイブホーク・ヘリコプターを含む紛れもない血統の歴史的な航空機に囲ま

れて言った。「そのためには、我々はこれ以上遅滞なく、しばしば議論してきた必要な変革と困難な選択を加速しなければならない。我々はリーダーを育て権限を与え、質の高いサービスと、兵士とその家族が最大限の潜在力に達するよう生活の質を提供しなければならない。さらに一定量の現実を付け加えるならば、この先困難な課題が待ち受けていることは疑う余地もないが、不可能ではない。統合参謀本部とともに働き、今日直面し、将来直面するであろう課題に立ち向かうための最良の軍事的アドバイスを提供することを楽しみにしている」

3月にノミネートされた際にも彼が言ったように、ブラウン大將は再び、彼のリーダーシップの四つの主義である、高い基準での実行 (execute at a high standard)、実行に当たっての規則正しさ (be disciplined in execution)、細部に注意を注ぐ (pay attention to the details)、そして楽しく (have fun) によって導かれ続ける、と述べた。

【ゴールドフィン大將】

ブラウン大將と同様に、彼に影響を及ぼし、彼の経歴を形作った人々の名を挙げた。その中から、自らのウィングマン「wingman」と呼ぶライト最前任上級曹長 (CMSgt Kaleth O. Wright, Chief Master Sergeant of the Air Force) を選び出した。「空軍参謀総長として私が下した決定の中のベストは、チーフ・ライトを選んだことである」

彼はドーン (Dawn) 夫人に対しても、「彼女と空軍人生の全てを一緒に歩んで来られたことは神の賜である。これまでの 37 年間、彼女が自分の夢を合わせてくれたおかげで、私は自分の夢を追い求めることが出来た」と感謝を述べた。

そして、ブラウン大將に言った。「空軍参謀総長最後の日となる 8 月 5 日、真の戦士、リーダー、そして個人的友人が、明日、空軍参謀総長としての第一歩を踏み出すことを、とても光榮に思った。お二人とも、おめでとう。我々の空軍の未来は、これまで無かったほど明るい！」

(米空軍 HP 記事を仮訳、再構成し、木村理事記)



Gen Brown salutes Secretary of the Air Force Barrett



The Air Force Honor Guard performs a pass in review



Sharene Brown, spouse of Gen Brown, presents the official Air Force Chief of Staff service cap to her husband

(<https://www.usafa.af.mil/News/Article/2303578/brown-formally-installed-as-22nd-air-force-chief-of-staff/>)

## ウィルズバック大将 太平洋空軍司令官に就任 Gen Wilsbach assumed command of Pacific Air Forces on 8 July 2020

7月8日、ハワイ州パールハーバー・ヒッカム統合基地（Joint Base Pearl Harbor - Hickam, Hawaii）及び地域をまたぐバーチャルの場で、インド・太平洋軍司令官デイビッドソン海軍大将（U.S. Navy Adm Philip Davidson, Commander of U.S. Indo-Pacific Command）と米空軍参謀総長ゴールドフィン大将（Gen David L. Goldfein, Chief of Staff of the U.S. Air Force）の執行により、太平洋空軍（PACAF）司令官のチェンジ・オブ・コマンド式典が挙行され、PACAFの兵士たちは、第36代となるウィルズバック大将（Gen Kenneth S. Wilsbach）を歓迎し、第35代のブラウン大将（Gen CQ Brown, Jr.）に別れを告げた。

チェンジ・オブ・コマンド式典は、軍人にとって極めて名誉な伝統である。全ての足跡やあらゆる出来事・人が登場する。通常であれば格納庫は隷下部隊の兵士で一杯になり、ステージには巨大なアメリカ国旗が掲げられ、背景には巨大で最も柔軟な運用が可能な輸送機 C-17 グローブマスターIII やコンパクトなマルチ・ロール戦闘機 F-16 ファイティング・ファルコンのような様々な航空機が並べられる。

今回の状況は異なるが、参列者の目はステージに向けられている。そして、シミュレーションによる部隊旗の入場、最後の敬礼、最初の敬礼、「指揮を解く」・「指揮を執る」の宣言をもって、ウィルズバック大将は太平洋空軍司令官に就任した。

この宣言、権限、責任は、歴史の中で繰り返し継承されてきた。遡ることアメリカ大陸軍（the Continental Army of the United States：アメリカ独立戦争に際し組織された正規軍）の時代から、チェンジ・オブ・コマンド式典は、空軍の伝統の不可欠な部分として今日まで続いている。



Adm Davidson, Gen Goldfein, Gen Wilsbach, and Gen Brown (from left)



Gen Kenneth S. Wilsbach, the 36th Commander, Pacific Air Forces

第36代太平洋空軍司令官は、主として日本、韓国、ハワイ、アラスカ、グアムで勤務する約46,000名の兵士を監督する。太平洋空軍の責任地域には、36カ国、世界の総人口の60%が所在し、地球表面の53%、1,000以上の口語に及び、9個の空軍施設、3つのナンバー空軍が所在する。

ウィルズバック大将は、太平洋空軍司令官就任前は、第7空軍司令官兼在韓米軍副司令官、アラスカ空軍司令官兼北米航空宇宙防衛司令部アラスカ管区司令官兼第11空軍司令官を歴任した。

PACAFは、柔軟機敏な空、宇宙、サイバースペース能力を投入し、インド太平洋軍の目的達成を支援し、同盟国とパートナーと一致協力して地域の安定と安全を強める。70年以上にわたりPACAFは、国家防衛に当たってきた。PACAFは太平洋の広範囲にわたり、航空戦力を迅速かつ決定的に投入する準備を、継続して行っている。

ブラウン大将はPACAFの兵士達にさようなら（good-bye）を告げたが、次期空軍参謀総長としてワシントンに向かうブラウン大将にとって、それは多分にハワイ語の「a hui hou」や「see you later」に近いものであろう。

### 【ゴールドフィン空軍参謀総長】

「ケン（＝ウィルズバック大将）は責任範囲であるインド太平洋地域の新参者ではない。今回の配置で太平洋地域における勤務は9回目（嘉手納に複数回、アラスカ州エレメンドルフ、ここハワイ、直近では韓国烏山空軍

基地において第7空軍司令官)となる。彼は統合戦闘の特性を熟知しており、すぐにでも戦える。Cruiser (= ウィルズバック大将)とCindy夫人は、コマンド・チームの概念そのものを高度に実践している」

#### 【ウィルズバック大将】

ウィルズバック大将は彼のスピーチで、太平洋空軍における優先事項のいくつかとして、軍のレディネス・レジリエンス、同盟国やパートナーとともに働くこと、兵士と家族をサポートすること、戦域において他のコンポーネントと連係することを述べた。

「既に紹介されたように、私は軍歴の約半分をここで任務に就いたが、時とともにこの戦域は確実に成熟し、劇的に変化し、より一層複雑になり、そして率直に申し上げれば、米国にとって戦略的中心となった。私はこの機会からエネルギーをもらい、重要な戦域で兵士たちを率いることをとても誇りに思う」

#### 【デイビッドソン大将】

デイビッドソン海軍大将は、ブラウン大将の在任期間の重要性について要約した。「過去2年間の彼のリーダーシップは、彼の部下、同僚、上司を革新し鼓舞し感銘を与える類の無い能力の証である。CQのリーダーシップによって、第5世代戦闘機能力をPACAF、豪空軍、韓国空軍に広め、統連合軍の打撃力を高め、ここインド太平洋地域において侵襲抑止の助けになっている」

在任中ブラウン大将は、256の重要なリーダーとしての用務を行い、インド太平洋の15カ国を訪問し、PACAF史上最も大きいAir Chief会合を主催した。

#### 【ブラウン大将】

「就任以来ずっと私は、第35代PACAF司令官として

(<https://www.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2268398/wilsbach-assumes-command-of-pacific-air-forces/>)



Gen Wilsbach receives his first salute



Gen Wilsbach gives remarks

任務に就くことを大変名誉に感じ、恩恵を受け (blessed)、誇りに思った。PACAFを率いる機会が得られたことは名誉だ。国防省の重視する重要戦域インド太平洋で率いるにあたり、デイビッドソン海軍大将とゴールドフィン大将から賜った信用と信頼は名誉である (honored)。PACAFにおいて一緒に達成した全てを誇りに思う。しかし、まだまだなされるべきことがあることを知っている。妻のShareneと私はPACAFのリーダーシップをCruiser (ウィルズバック大将)とCindy夫人に引き渡すことを大変名誉に思う」

(太平洋空軍HP記事を仮訳、再構成し、木村理事記)

## ブラウン大将 JAAGA 名誉会員に Gen Brown became an honorary member of JAAGA

ブラウン大将の米空軍参謀総長指名を受け、3月9日に齊藤会長からお祝いの書簡 (JAAGAだより58号参照) を発出し、その中で、間もなく正式に名誉会員就任を要請する旨お伝えした。米議会上院の米空軍参謀総長任命発表を受け、6月11日、会長から入会を要請し、翌日、ブラウン大将から受諾する旨の連絡を受け、太平洋空軍司令官のチェンジ・オブ・コマンドの日である7月8日付をもって、ブラウン大将は名誉会員としてJAAGAに入会された。

名誉会員としての入会に当たっては盾を贈呈しているが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により米国宛の郵便業務

が停止する等、ブラウン大将離任までにハワイに届けることが叶わないため、8月に交代する新防衛駐在官菅井空将補に当該盾を託した。着任後の状況を見て、ワシントンD.C.で菅井空将補からブラウン大将に直接手交される予定である。

なお、空軍参謀総長任命発表に際しての齊藤会長からの祝意・名誉会員としての入会要請に対して、お礼、JAAGAのサポートへの感謝、名誉会員への案内に対する謝意、今後も連携をとる意向が、直筆の書簡をもって表明された。

(木村理事記)

## 日米相互特技訓練 Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

日米相互特技訓練の令和2年度計画は、新型コロナウイルスの状況を見定めつつ調整が進められている。

本訓練は、日米相互の理解及び友好を深めるとともに英語能力の向上の動機付けを目的として、平成7年度から在日米空軍と航空自衛隊の間で行われてきた「日米相互部隊研修」に始まり、平成27年度からは日米双方の特技能力の向上による日米共同対処能力の基盤強化及び現場レベルでの相互理解をさらに深めるために名称を「日米相互特技訓練」に変更し現在に至る。

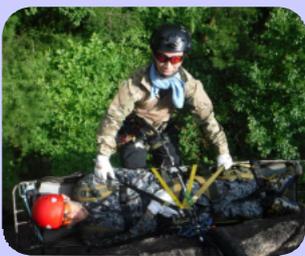
また、本訓練に加えて、在日米空軍の各基地が主催する下士官資質向上セミナーへの参加などにより、多様な特技及び環境（受入基地、分屯基地）において効果的な訓練が実施されている。最近では、米空軍基地への人の差し出し及び空自各部隊への下士官の受入れも比較的円滑に行われるようになり、また、本訓練の重要性に係る理解や認知度も向上し、年々充実してきたところである。

今回、松島救難隊所属救難員の川越裕樹2等空曹から「日米相互特技訓練への参加を振り返って」という表題で寄稿いただいたので紹介する。川越2曹は平成23年度の日米相互特技訓練に参加し、日米相互理解や英語能力の向上の重要性について強く認識され、部隊勤務にもその貴重な体験が生かされているとのことである。（福永理事記）

### 寄稿

#### 「日米相互特技訓練への参加を振り返って」（平成23年度参加）

松島救難隊 救難員 2等空曹 川越裕樹



TSgt Yuki Kawagoe, engages Mountain Rescue Training, June 2019

私ですが、時々「何がきっかけで英語を勉強するようになったのですか。」と質問されることがあります。振り返ってみると、前述した訓練等の中で一番初めに参加した訓練が日米相互部隊研修（現在の日米相互特技訓練）であり、私の英語学習のきっかけとなりました。米軍のPJ（Pararescue Jumpers：救難員）部隊への研修の話をついた時、英語が得意ではなかった私は断るつもりでいました。しかし、当時の救難員チーフに「行ってこい」と言われ、逆らえるわけもなく「はい」と答えたのが全ての始まりでした。あれから約9

年経って、私は当時のチーフにとっても感謝しています。この研修への参加が、私の自衛隊人生を大きく変えたといっても過言ではありません。

レッド・フラッグ、コープ・エンジェル、キーン・ソード、コープ・ノース、日米相互部隊研修、JELF（環太平洋地域若年下士官リーダーシップ・フォーラム）、NCOアカデミー。これらは、私がこれまで参加した他国軍人との共同訓練等です。現在は、部隊の英語教育の教官のマネ事をさせて頂いている

日米相互特技訓練とは、航空自衛隊（以下「空自」という。）隊員1名に対し、同一特技の対番者（米空軍下士官1名を基準）に支援を受けつつ特技訓練を行うものです。私の研修先は嘉手納基地第31救難中隊という主にPJだけで人員構成されている部隊でした。見学だけではなく、地上における様々な訓練と一緒に実施することができました。特技は同じでも日米間で装備品、訓練施設、訓練規模等に大きな差があることを実感し圧倒されましたが、救助技術

に関しては空自PJが少しも引けを取っていないと感じたことを覚えています。拙い英語でしたが、相手も同じ職種なのでなんとなく言っていることが理解でき、救難員ならではの話で盛り上がりました。救難員課程と米軍PJスクールにおける学生経験は、二人とももう二度とやりたくないという苦しい経験は同じであり、お互いに共感できるエピソードもあり、相手との心理的な距離がかなり近くなりました。また、部隊全員がアフガニスタンでの実戦経験があり、その貴重な体験談（銃撃戦等）を生で聞くことができ、実戦を知っている米軍の強さを目の当たりにしました。約1週間の訓練は、言葉の壁を感じて日本語を恋しく感じたこともありました。しかし、この訓練を機に英語に興味を持って英語学習を始めるきっかけとなったことは、紛



Group photo of Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program 2011



Rescue Training, U.S. Pararescuer wears scuba equipment for safety check



Water Escape Training

れもない事実です。その後、英語能力が向上するに伴い、冒頭の訓練等に参加する機会が増え、微力ながら組織に貢献することができました。

日米共同訓練では、自分から積極的に英語を話そうとしない限り英語を話す機会がありません。これは、国籍に関わらず、言葉の壁がある環境に身を置かれると、言葉の通じる者同士で集まることが自然なことだからです。それに対し、日米相互特技訓練は、英語を話すしかない環境にたった1人で放り出されることとなります。これは本訓練の最大のメリットであると思います。

当時も日米交流は重要と言われていました。9年たった今、世界情勢や日本の安全保障環境は大きく変わり、更なる日米同盟の強化はもちろん、友好国との協力体制が必須という時代になりました。その意味でも、訓練等を通じた他国軍人との現場レベルでの交流もますます重要視されてきていると思います。日米相互理解や英語能力向上の動機づけ等も目的である日米相互特技訓練は「貴重な体験だった」で終わらせるにはあま

りにももったいない訓練だと思います。今回の投稿を機に過去の訓練を振り返り、今一度その素晴らしさを再認識することができました。私も9年前に言われた「行ってこい」を、今度は周りの後輩達に自信を持って伝え、もっともっと数多くの交流を図れたら良いと思います。最後に、この場をお借りして、このような発表の機会を与えてくださったJAAGAの皆様や、支援して下さる部隊の方々に感謝を申し上げます。



U.S. Airman alerts all around with gun in wartime scenario



TSgt Kawagoe joins Exercise KEEN SWORD, November 2014

寄稿

勲章受章「メリトリアス・サービス・メダル」  
Meritorious Service Medal Presentation for CMSgt Uchikoshi

6月9日(火)、米空軍横田基地第5空軍庁舎において、航空総隊司令部総務課の打越裕人空曹長(CMSgt Uchikoshi, Hiroto)が、シュナイダー在日米軍/第5空軍司令官(Lt Gen Kevin B. Schneider, CC USFJ/5AF)



Lt Gen Schneider, CC USFJ/5AF pins the medal on CMSgt Uchikoshi

より米軍の戦功章(勲章)であるメリトリアス・サービス・メダル(Meritorious Service Medal)を授与されました。前所属である第5空軍内CCJ(横田訓練調整官室)において、4年強の

間、准曹士レベルの様々な交流を支援した功績が認められ、この度の受章となりました。

新型コロナウイルス禍での式典でありましたが、ソーシャル・ディスタンスを取った椅子が用意され、米軍からは副司令官や最先任以下錚々たる面々が、空自からは横田各部隊の准曹士先任及び総務課の同僚らが参列しました。厳粛な雰囲気の下、シュナイダー司令官からユーモアを交えた功績紹介の後、打越曹長の胸に紅白のリボンの勲章が下げられました。

受章のスピーチでは米軍における勤務でリーダーシップの重要性について学び、また人とのつながりが一番大事であることに気づいたと述べ、支えてくれた人々に感謝の意を表し、“If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together. (早く進みたければ一人で行け、遠くまで進みたければ皆で行け)”というアフリカの格言及び「哲学者」クルーゼルニック前第5空軍最先

任上級曹長がいつも日本語で述べるという「われわれはともにすすんでまいります。」という言葉を紹介しました。

卓越した語学力とユーモアと人徳で皆に愛され、現在進行形でまさに日米友好の懸け橋となっている打越曹長と、我々はこれからも共に進んで参ります。

(総隊司令部総務課 愉快的な同僚記)



Citation Order  
Lt Gen Schneider (left),  
CMSgt Uchikoshi (right)



CMSgt Uchikoshi makes a speech

## 空自 F-2、F-15 と米軍 B-1 との共同訓練 Koku-Jieitai & USAF conduct joint training above the Japan Sea and the East China Sea

航空自衛隊は、11月17日（火）、日米共同対処能力及び部隊の戦術技量の向上を目的として、日本海、東シナ海及び沖縄周辺空域において米空軍との共同訓練（編隊航法訓練及び防空戦闘訓練）を実施した。参加部隊は、第5航空団（新田原）F-15×4機、第6航空団（小松）F-15×4機、第8航空団（築城）F-2×4機、第9航空団（那覇）F-15×4機、米空軍 B-1×2機であった。

なお、だより 58号の米空軍コーナーで4月22日（水）に行われた日米共同訓練について紹介したが、それ以降、米空軍 B-1 との訓練は 11回を数える。

## 航空自衛隊コーナー from Koku-Jieitai



B-1 and F-15

## 「新たな領域」が共通のキーワード：“New Domain” is the Key Word

### 航空観閲式 JASDF Air Review



Instruction by Prime Minister Suga



Review by Prime Minister Suga

航空観閲式が11月28日（土）、菅義偉総理大臣を観閲官として、6年ぶり初の入間基地で開催された。最近の防衛省・自衛隊を取り巻く状況の変化に伴い、従来どおりの航空観閲式の実施は、任務遂行能力に支障を生じかねない状況にあること等を踏まえ、今回の航空観閲式は無観客の形態で、戦闘機・ブルーインパルスを含む航空機による展示飛行は行われず、儀じょう、栄誉礼及び巡閲に続き、訓示が行われ、その後部隊視察が実施された。

総理大臣は、殉職者を含む隊員の使命感に感謝し誇りに思う旨述べ期待を表明した後、我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す中、宇宙やサイバー、電磁波と

いった、新たな領域での対応が求められていると指摘し、組織の縦割りを排し、陸・海・空自衛隊の垣根を越えて取り組むことが重要であると訓示した。なお、航空観閲式の一部の様子がライブ配信されたとともに、YouTube 航空自衛隊チャンネルで編集版が配信されている。

### RC-2 配備記念式典 Ceremony, induction of the RC-2

10月1日（木）、入間基地において、RC-2（電波情報収集機）配備記念式典が実施された。現在の戦闘様相は、技術の進展を背景に、陸・海・空という従来の領域のみならず、宇宙・サイバー・電磁波といった新たな領域を組み合わせたものとなっており、RC-2の配備は電磁波領域において優勢を確保し、領域横断作戦を実現する点で大きな意義があり、今後、運用に向け、所要の試験及び要員養成等が実施される。



In front of RC-2

### 航空幕僚長の米国出張 Chief of Staff visited Hawaii

11月17日（火）～22日（日）、航空幕僚長井筒俊司空将がハワイに出張し、米宇宙軍及び米太平洋空軍が主催する空軍参謀長等会議に参加した。参加者との間で航空・宇宙分野の取組等について意見交換を行うことは、航空自衛隊が航空（新たな領域である）宇宙分野における取組を進めていくうえで必要な技術的・専門的知見の蓄積につながるものであり、大変有意義なものとなった。8月に空幕長就任後、公務で外国を訪問するのは初めて。



International senior leader engagement

（全記事、航空自衛隊・首相官邸報道発表等を基に、浅井理事記）

## 米空軍コーナー from 5th Air Force

## USAF, Koku-Jieitai strengthen Agile Combat Employment capabilities

世界各地で蔓延している新型コロナ禍は、誰も想像し得なかった未曾有の事態を招いている。しかし、そんな苦境の中にあっても、日米共同訓練は8月24日から28日まで北海道千歳基地において、「在日米軍再編に係る訓練移転」の位置付けで粛々と遂行された。その訓練状況と訓練の意義について述べた米第5空軍の記事を紹介する。

この記事からは、ACE (Agile Combat Employment : 迅速機敏な戦闘展開) 能力を向上させる日米共同訓練の意義が、「日米間の相互運用性の向上」のみならず、人的資源の効率的活用による更なる即応性向上、そして、全世界的な新型コロナ禍であっても有事即応任務を優先するという強い意思を示すことにあるということが理解できる。(池田理事記)



An F-16 Fighting Falcon prepares for takeoff with the support of a Japanese Airman at Chitose AB



USAF Sergeant explains and answers F-16 operations to Koku-Jieitai Sergeant

(<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2328182/usaf-jasdf-strengthen-agile-combat-employment-capabilities/>)

米空軍及び航空自衛隊の隊員は、8月24日から28日の間、千歳基地で実施された「米軍再編に係る訓練移転」(Aviation Training Relocation) の訓練として、対航空防衛やACE能力向上、多方面の能力向上に磨きをかけることを主眼とする共同訓練を実施した。訓練は、米第5空軍の指導の下、米太平洋空軍隷下第35戦闘航空団、第374空輸航空団、第18航空団並びに航空自衛隊総隊隷下第2航空団、航空支援集団隷下第1、第2、第3輸送航空隊の隊員及び航空機が参加して行われ、全体として、米空軍は約200名の隊員、第67飛行隊所属の6機のF-15イーグル、第13飛行隊所属の6機のF-16ファイティング・ファルコンが千歳基地に展開した。

隊員を日々の通常業務から離れた場に置くことは、ACE概念にとって重要であり、これによって隊員は、航空作戦を支援するための多くの技術に熟練する必要性を認識する。隊員に複数分野の能力を持たせる (multi-capable Airmen) ことによって、戦力分散時の隊員所要数を減らすことができ、如何なる潜在的脅威に対しても、素早く効果的に対処できる。

加えて、現場で達成された訓練によって、共同で警備、整備、燃料給油を担う要員と一緒に働いて新たな技術を教え合う能力を、米空軍と航空自衛隊のパートナーが有しているかが試された。COVID-19からパートナーの安全を守るために注意深く対応しつつ訓練を優先させたことは、達成状況を見ると、米空軍と航空自衛隊の隊員にとって重要であった。

### 【第67飛行隊長 Beusekom 中佐】

「この千歳訓練移転は、第67飛行隊の運用・整備・支援要員に対し、我が在日米軍・航空自衛隊のパートナーと共にACE能力を演練し習熟するための、非常に素晴らしい機会を与えてくれた。ここ千歳で、展開可能で安全な通信を実地に演練するとともに、空輸可能なブラダー・タンクを用いて米空軍のF-15、F-16、航空自衛隊のF-15Jに燃料給油を行い、日米隊員の能力を向上させた」

### 【第13航空機整備班プロダクト管理 Morin 曹長】

「MCA (multi-capable Airmen) のコンセプトは、複合的な専門分野を活用し、それらを相互の任務遂行に融合させて遂行されてきた。例えば、アビオニクス特技員が航空機の発進要領を学ぶことによって、実践出来るようになり、他の特技員は変化する状況に対処し続けることが出来る」

### 【5空軍作戦企画部長 (本訓練実施責任者) Brandon McBrayer 大佐】

「COVID-19の困難な状況にもかかわらず日本の盟友との訓練を継続することは、強固な相互運用性と日本防衛を支援する即応態勢を維持するために、非常に大切なことである。日米隊員は、COVID-19への感染リスクを減らす厳格な予防策を維持し、その上で、彼らはお互いのACE能力を強化するための好機を最大限に活用し、インド太平洋地域での平和と安全を維持する能力を更に確たるものにすることができた」 (池田理事仮訳)

寄稿

## 米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

### Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

#### 【 研究開発部門 】

航空開発実験集団 飛行開発実験団

(Air Development and Test Wing)

Maj Darius V. Brown

初めまして。皆さんこんにちは。私は防衛交換要員【研究開発部門】のダリアス・V・ブラウン少佐です。趣味はラグビーやサッカーをすることです。また、家族と一緒に焼き鳥（鳥貴族）を食べるのが好きです。

職種はテストエンジニアで、前任地はエドワード空軍基地で勤務していました。そこでは F-35A/B/C 全型を含む 11 機を保有し、私の主任務は兵器システムの試験事業を企画、実行、分析及び戦術評価し、運用の有効性と適合性を判定することでした。それ以前は、米空軍技術研究所（AFRL）でプログラム・マネージャーとして極超音速エンジンの研究開発及び小規模な無人航空機の試験的な開発に関する業務をしていました。

現在、私が所属している職場は、飛行開発実験団で航空機及び航空機搭載機器等の試験評価を行う空自唯一の研究開発部隊であり、航空自衛隊きっての頭脳集団といわれています。

私の職務は、航空自衛隊が実施している航空機及びウエポン等の装備品等の開発、改修、試験及び評価に対する技術的助言、戦闘機及び輸送機等の飛行試験等に係る計画支援並びに技術資料の翻訳及び見直し、課程学生等への米空軍研究開発及び飛行試験評価に関する教育等です。

そして今回、私は KC-30 と F-2 の日豪空中給油試験や F-2 の技術的追認事業（アップグレード）等に参画できたことで、航空自衛隊の研究開発を学ぶことができ、自分にとって本当に良い経験となりました。試験中に発生した様々な不具合に対して、原因を突き止める探求心、問題を解決する力、論理的に思考する力など、同じエン

ジニアとして空自隊員に敬意を表するとともに、多角的な知識を増やすことができました。

また、課程学生に対しては、米空軍の研究開発及び調達等のプロセスを教育することで、自らの知識の向上を図ることができただけでなく、将来の自衛隊の

研究開発におけるリーダーとなる技術幹部らに教育できたことは、貴重な機会でありました。

さらに航空自衛隊では、部隊全体の英語能力の底上げを図るため英語競技会が実施されており、飛行開発実験団の代表選手たちの英語訓練を担当しました。この機会を通じて幹部から空曹士までさまざまな隊員との交流を深めることができ、絆を強くできたことは本当に嬉しく思いました。

業務以外でも、英会話教室を様々な部署で開催したり、基地のサッカー、ラグビークラブに参加し、共に汗をかき、スポーツを通して楽しむことができました。

また、職場の仲間とは、休日を利用して4時間耐久リレーマラソンに参加したり、私の昇任パーティを開催してもらったりたくさんのイベントを企画してもらったり、たくさんの思い出を作ることができました。



Maj Darius V. Brown



Air Development and Test Command English Competition



“Gifu Seiryu Relay Marathon”（岐阜清流リレーマラソン） with coworkers



With his family ; son, Thaddeus (5 years old) and wife, Kate



“Yumehisyo Daiko” (夢飛翔太鼓) practice with a few members

余暇では日本を楽しむために、様々な観光地を巡りました。北海道、鳥取、石川、福井、滋賀、大阪、兵庫、三重、愛知、岐阜、静岡、神奈川、千葉、東京と全ては伝えきれないほどですが、その中でも1番の記憶に残っているのは鳥取です。透明度の高い青い海、起伏のある広大な美しい砂丘、そして自然遺産の大山（だいせん）を見ながら温泉に入ることができる場所は、地球上で他には考えられません。

旅行以外でも、多くの様々な部外活動に参加しました。小牧市と大垣市で子供たちにラグビーを教えるのが私の喜びでした。子供たちは私の日本語のスキルを手伝ってくれ、私は彼らのラグビー・スキルの向上を支援しました。また、大垣市民と航空自衛隊員の合同チームでラグビーをする機会もありました。そして、我々は昨年の社会人の秋季リーグで2位となりました。

武道は私にとって目新しいものではありませんが、柔道を学ぶのはこれが初めてでした。日本について学び、自己規律を実践しながら、多くの市民の人々と交流する

ことができる素晴らしい方法でした。

音楽が大好きで日本の文化と音楽を探求するため、岐南町の和太鼓グループに参加しました。毎週一緒に一生懸命練習することで、和太鼓メンバーはかけがえのない家族のような存在になりました。太鼓での日々は、決して忘れられないもので、この経験を永遠に心に刻みます。

交換幹部の勤務を通じて、良き思い出と良き友達を得ることができたことは、何にも代えがたいものです。航空自衛隊の皆様、そして派遣していただいた米空軍関係者の皆様に感謝しています。日米間でこのような人的交流を図ることで、お互いを理解しあい、尊敬し、絆を深めることができたことは本当に嬉しく思います。この交流は絶やすことなく、後世に継続し、より日米の関係を強化しなければならぬものだと思います。我々の未来が明るく、好ましいものになりますように。今後も宜しくお願い致します。



「かまくら」

作:宇山佳男OB

投稿

## 「米空軍の将来動向について（その2）」 — 米空軍態勢報告（USAF Posture Statement : PS） を読み解く — 正会員 荒木淳一

### 1 はじめに

前回、JAAGA 便りに「米空軍の将来動向について（その1）」として、CSBA (Center for Strategic and Budgetary Assessments) 報告書「米空軍の将来の戦闘空軍力に関する5つの優先事項」に関する個人的な分析を投稿させて頂いた。その切っ掛けは、昨年 JAAGA 訪米団の一員として参加した AFA カンファレンス及び主要幹部との意見交換において感じた準備不足への反省であることは前回述べた通りである。前回取り上げた CSBA 報告書以外にも、米空軍の将来動向を探るために参考になる文書等は多数存在するが、今回は米空軍態勢報告 (USAF Posture Statement : PS) を取り上げてみたい。



PSとは、次年度の予算要求を行う過程において米空軍長官と米空軍参謀長が連名で作成する米国議会（上院、下院）軍事委員会等の公聴会における説明の基礎資料である。この報告書は、次の3つの観点から米空軍の現状や将来動向を探る上で重要な手掛かりとなると考える。まず第一に、各予算年度毎に作成されるPSは、その時点における米空軍としての戦略環境等にかかる認識並びに米空軍の現状と課題等について言及されている。第二に、複数年度のPSを分析することで、米空軍の考え方のトレンドや変化を理解することが出来る。第三に、戦略体系文書の改訂などの安全保障政策の転換点や空軍参謀総長等のリーダーシップの交替の節目における米空軍の対応や変化を知ることが出来る。特にトランプ政権発足後、米国の安全保障戦略、国家防衛戦略は大きな転換を遂げており、転換前後のPSを比較することで米空軍の変化の方向性やその背景的要因を理解することは、将来を見通す上で重要な手掛かりを得られるものと考えられる。

本稿においては、FY2017PSからFY2021PSの5年分のPSを分析することとしたい。この間に米空軍参謀総長はウェルシュ大将からゴールドフィン大将へ、オバマ政権からトランプ政権に移行する等、リーダーシップの大きな転換の時期であった。また、2018年には国家防衛戦略が改定されるなど、米国国防政策の大きな転換の時期でもあり、その際の米空軍の変化やその方向性を確認することは将来を見通すうえで貴重な示唆を与えて

くれるであろう。また、本年8月には米空軍第22代参謀総長にブラウン大将（前PACAF司令官）がゴールドフィン大将の後任として就任した。今後、彼が初めて出すPSがどう変化するかを分析する為にも、この5年間のPSの流れを概観することには大きな意味がある。本稿ではFY2017PSから5年分のPSの概要並びにキー・ポイントを分析することにより、米空軍の将来動向を考えるヒントを探ると共に、航空自衛隊に対するインプリケーション（含意）を考察することとしたい。

### 2 過去5年間の米空軍態勢報告 (PS) の概要等

#### (1) 全般

5年間（FY2017～FY2021）のPSを通して、2011年の予算制限法 (Budget Control Act : BCA) 以降、継続する国防予算の抑制傾向並びにテロとの戦いの継続（高いOperation Tempo : OPTEMPO）により、米空軍のレディネスの低下、戦力規模の縮小、近代化の遅れ等の負の影響が出ていることに対する強い危機感が示されている。

ウェルシュ大将の出したFY2017PSにもこの問題認識は示されており、政権交代、参謀総長交替前から米空軍の継続する組織的課題であったことが伺える。但し、FY2017PS策定時には、国防戦略上の焦点は国際テロとの戦いであり、「Global Vigilance, Global Reach, Global Power（地球規模での監視、到達、力の行使）」というビジョンを米空軍は引き続き達成可能であると評価している。これに対して、ゴールドフィン大将は、彼にとっての最初のFY2018PSの冒頭において、「米空軍の規模が歴史的に最も小さくなり、技術的優位が危険に晒されている」ことから、任務達成が困難になりつつあることを間接的に示すなど、強烈な危機意識を表明し、速やかな改革が必要であると述べている。

戦略文書 (NSS, NDS) により大国間競争への回帰が示され、米議会からNDS2018を実現する為に必要となる米空軍の能力に関する検討を求められていることが、ゴールドフィン大将にとって二番目のFY2019PSに示されている。そして、その次のFY2020PSにおいて、「The Air Force We Need : AFWN」という文書の中で386個飛行隊が必要であるとの検討結果が示されている。国家が求めることを実現する為に「空軍は小さすぎる (Air Force is too small)」と述べる一方で、「過去と同じで単に量が多いことは最善の答えではない (More of the same isn't the best answer)」とも述べている。その為、最先端技術と革新的な方法によって戦略的競争

のみならずハイエンドの戦いにも勝利できる圧倒的な優位性を獲得することを目指す」と述べると共に、その為の新たな統合全領域作戦構想（Joint All Domain Operation：JADO）（当初は Multi-Domain Operation：MDO）を提示している。

落ち込んだレディネスの回復、戦力規模の増強、近代化の遅れの取り戻しという三つの重い課題を同時に解決し、大国間の競争（ハイエンドの戦い）に対応できる態勢づくりを行うことは決して容易なことではない。ゴールドフィン大將は、戦略文書策定以前から、PSにおいて米空軍の課題や問題認識を明確にしているが、年々課題へ取り組む焦点や優先順位を整理してきている。まず当面は、「衰退傾向の阻止」や「戦力の回復」を図るとして、レディネスの回復を最優先させつつ、必要な近代化を進めることを追求すると述べている。同時に従来のやり方では課題の解決は不可能であるとして新たにJADOを提示している。また、「冷戦期の調達システムでは(大国間の競争に)勝てない」として、将来戦力を「より速くより賢く」実戦配備することによって敵に対する優位性を維持出来るのであり、その為に開発・調達プロセスの改革が必要であると強調している。

FY2018PSからFY2021PSの流れを見ると、ゴールドフィン大將の問題認識は大きく変わらないものの、年々それに対する解決策が整理され焦点が明確になると共に、各課題の関連性を踏まえて最終的には作戦構想から研究開発・調達の在り方を含む総合的な「戦力設計（Force Design）」へと収斂している。このような流れを踏まえ、後任のブラウン大將がどのような考え方をFY2022PSに示すのか、ゴールドフィン大將が主導してきた構想の核であるJADO（JADC2、ABMS等）を今後どのように発展させてゆくのが今後の注目点となるであろう。

## （2）各年度のPSの概要等

### 【FY2017PS】

オバマ政権末期に、ゴールドフィン大將の前任であるウェルシュ大將が策定した最後のPSである。中東における長年のテロとの戦いの継続と国防予算の上限を定めた予算制限法（Budget Control Act：BCA）による予算抑制の影響により、戦力規模の縮小、レディネスの低下、近代化の遅れが生じているという空軍の問題認識は、事後のPSと共通するものである。また、米国の戦略的優位性は変わらないものの技術的優位や能力的優位は危険なほど差を詰められており、競争力の低下が紛争誘発の原因になりうると警告している。テロとの戦い継続によるOPTEMPOの影響よりも、オバマ政権下で作られたBCAとそれを巡る議会の動きの予測困難性がレディネスの維持や近代化に及ぼす影響が大きいとして、BCAの破棄を求めている。

他方で、戦略体系文書で示される脅威は、依然として非国家主体（国際テロ等）による非対称的アプローチへの対応（テロとの戦い）であり、空軍のビジョンである

「Global Vigilance, Global Reach, Global Power（地球規模での監視、到達、力の行使）」は達成可能であると述べている。NDS2018が想定する大国間競争の結果として予期されるハイエンドの戦いは未だ想定されていないことから、戦力規模の縮小、レディネスの低下、近代化の遅れという問題が生み出す国家としてのリスクに関する認識が議会との間で共有できないというジレンマを抱えているように見える。従って、随所に危機感が示され、削減される予算の下で何を優先するかという難しい判断が求められているものの、最終的に求められる任務は達成可能であると読める内容となっている。ウェルシュ大將のPSの特徴の一つとして、各種課題やその影響に関する表現が婉曲的であり、ある意味で官僚的で曖昧な表現が多いことから、空軍のトップの問題認識や意図がストレートに伝わりにくい文書となっている。

### 【FY2018PS】

ゴールドフィン参謀総長にとって初めてのPSであり、トランプ政権となって半年後に出されたPSである。未だ戦略文書の改定は行われていないものの、敵対的勢力（中露）が米国の戦力投射や行動の自由を阻害する為の能力を急速に開発していること（A2AD能力の向上）、米軍が何十年も維持してきた圧倒的な軍事力、技術力の優位性が急速に失われつつあること、それらにより国際社会の不安定化と戦略的リスクが増大するという危機感を率直に示す文書となっている。

PSの冒頭で、どのような観点から分析しても同じ結論になるとして2つの強烈な問題認識を提示している。一つは、空軍の規模が求められる任務に対して小さすぎることであり、二つ目は、航空宇宙領域における米国の優位性が危険に晒されていることである。その上で、まず取り組むべき課題として、衰退傾向への歯止めと戦力の回復を上げている。前年度予算（FY2017）によるレディネス回復への着手並びにクリティカルな能力不足と近代化の遅れに関する対応を評価しつつも、それまでの予算削減や予算を巡る不安定さが戦略に基づいていないことを強く批判している。

戦力の回復の為の取り組みとして次の4つの分野を挙げている。①レディネスの回復、②費用対効果の高い近代化、③将来に向けた革新、④強力なリーダーの育成である。①レディネスの回復に関しては、結局は人の問題であり専門家養成の為には募集、教育・訓練、維持が重要であり、必要な増員を行うとしている。また、空軍の心臓部でありレディネスを生み出す現場である飛行隊（SQ）の再活性化に努力する旨述べている。②費用対効果の高い近代化に関しては、最優先すべき近代化事業（F-35A、KC-46、B-21）の推進と核抑止力の近代化、宇宙における脅威への対応、サイバー領域の近代化を挙げている。中でも米空軍が担う核のトライアッド（ICBM、SLBM、戦略爆撃機）の2/3の近代化と核のC3（Command, Control and Communication）を重視す

る旨述べている。③将来に向けた革新の為には、研究開発と試験・評価プロセスが死活的に重要であり、ゲーム・チェンジャーへの投資を増加すると共に、敵勢力に差を詰められることなく圧倒するために、調達プロセスの加速化が極めて重要であるとしている。

前年の FY2017PS と比べると単刀直入かつ簡明な表現の文書であり、問題認識と何をなすべきか、何をしたいのかが具体的に書き込まれ、参謀総長の問題認識と意図が極めて明快な文書となっている。FY2018 予算で、戦力の衰退化傾向を止め、戦力の回復を図ると共に必要な近代化を進めるという明確な意思表示はなされているものの、どのように改革を行うかという考え方は示し切れていない。

### 【FY2019PS】

二つの戦略文書（NSS2017、NDS2018）を受けた最初の PS であり、戦略の大きな変更（大国間の競争、力による平和）を踏まえ、同等の大国と競争し、抑止し、ハイエンドの戦いにも勝利できる能力と規模を目指すという明確な意志が示されている。米空軍の現状に関する問題認識（長年に渡る予算削減と対テロ戦への専念によるレディネス低下、戦力規模の縮小、近代化の遅れ等）は変わっていないものの、達成すべき目標が戦略文書等によって明確になったことから、議会の要求に応じて NDS2018 の実行に必要な空軍の能力に関する検討（検討結果は「AFWN（The Air Force We Need）」に記載）を実施していることに言及している。

戦略環境と脅威認識を踏まえた 5 つの主任務（①航空・宇宙優勢の獲得、②地球規模の攻撃、③迅速な地球規模の機動、④地球規模の ISR、⑤指揮・統制）、戦略的方向性（中露との長期的な競争、将来戦は MDO、SQ が戦力の基本単位）を示し、努力を継続すべき事項（レディネスの回復・維持、人のケア、核抑止力／戦力の近代化）、更に NDS 実行に当たって変えなければならない事項（宇宙優勢、MDC2、航空優勢、対テロの軽攻撃能力、科学技術戦略）と予算的な優先順位（戦闘レディネスの改善、安全・確実・効果的な核抑止、費用対効果の高い近代化、防御可能な宇宙への迅速な移行、ネットワーク化された戦闘管理（Networked Battle Management）、同盟関係の強化）を提示している。また、それらを実行する上で必要となる空軍省改革（事業見直し、司令部見直し、調達見直し、業務の簡素化）が示されている。単刀直入で理解しやすい表現と構成であり、問題認識と取り組みが極めて明確となっている。

他方で、これ以前の PS で示された予算削減に対する強い危機感の表明や議会に対する支援の要請は見当たらない。トランプ政権移行後に国防予算が増加されたことを踏まえたものと思われる。依然として BCA の対象期間であり予算決定を巡るプロセスは予測困難な状況が続くものの、FY2018 予算をある程度評価していることから、直接的な言及を避けたものと推測される。

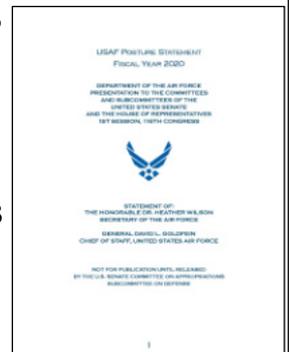
戦略文書を受けた大国間競争とハイエンドの戦いに対応する新たな作戦構想の一部として、MDC2 や ABMS の考え方が表明されている。議会の要求に応えた検討（NDS 実行に何が必要か、何個 SQ 必要か）を実施中であることに言及しており、検討結果（「AFWN」）は FY2020PS に反映されている。FY2018 までに示していた JSTARS（Joint Surveillance and Target Attack Radar System）や AWACS の換装（機種更新）事業を転換させ、MDC2 に寄与する ABMS への移行（プラットフォームからシステムへの移行）を表明しているのは大きな特徴と言える。更に、米空軍の戦闘能力の基本が SQ であり、それを再活性化することが NDS 遂行に必要な将来のリーダー育成に繋がるというゴールドフィン大将の現場重視の考え方が伺える。

### 【FY2020PS】

議会からの要請を受け、NDS 実行の為に必要な空軍力を検討した結果（「AFWN」）を踏まえた初めての PS であり、ゴールドフィン参謀総長にとっては 3 回目の PS である。NDS2018 が示す 5 つの主要任務（①本土防衛、②安全、確実、効果的な核抑止、③強力な通常戦力の敵の撃破、④機会主義的な侵略の抑止、⑤暴力的原理主義組織を費用対効果の高い方法で崩壊させる）において、競争し、抑止し、勝利する為には、空軍力が常に最前線に立たなければならないとの認識を示している。

「AFWN」で示された 386 個飛行隊は、予算的に賄える戦力ではなく、NDS を実行する為に必要とされる理論的な戦力規模であるとしつつも、現状（312 個飛行隊）では小さすぎるとして増強する必要性を強調している。他方で、規模を増やすだけでは議会に対する答えにはならないとして、新たな革新的方法で最先端の能力を生み出すための作戦構想（MDO）の概要を提示している。この構想は、センサー、ウェポン、プラットフォームを統合ネットワークにより繋ぎ、情報の優越によって全ての領域の戦闘効果を同時にかつ総合的に向上させることにより、敵に対して許容できない程のジレンマを強要することを念頭に置いている。また、実戦的な実・仮想訓練場の整備などの取り組みと共に費用対効果が高い整備と後方を実現する為の取り組み（「Condition Based Maintenance」等）について考え方や具体的な取り組みを提示している。

技術的優位性を維持する為には、ゲーム・チェンジング技術（超音速兵器、指向エネルギー兵器、可変ジェット推進装置等）への投資と共に MDO の為の ABMS 開発や F-35 の整備の推進等を追求する旨述べている。更に、宇宙領域における敵からの挑戦に対して、現在の優位性



を維持する為には防御可能な宇宙態勢づくりを加速すべきとの認識を示している。トランプ政権が宇宙領域が戦闘領域であるとの認識を公的に示したこと、並びに独立軍種としての宇宙軍を目指す議会の動きを評価している。宇宙領域が戦闘領域になったことに伴い、現在は宇宙オペレーターである宇宙関連の専門家を戦士 (Warrior、Warfighter) にする為に時間と資源を投資するとしている。

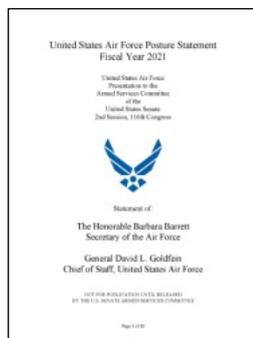
大国間競争相手が軍民融合のアプローチによって技術的優位性を得ようとしているとの認識から、冷戦時代の調達システムでは勝てないとして、新たな調達プロセスの必要性と、より速くより賢く実戦配備する為の調達改革への取り組みを示している。議会から軍種に委譲された権限 (開発事業に関するもの) を最大活用し調達プロセスを迅速化する努力を行っており、次の3つの要因、①プロトタイプ化 (実現可能性、効果等の先行的な検証)、②テイルード調達戦略 (事業の特性に応じた調達プロセス)、③迅速なソフトウェア開発 (知的財産権やデータ、ソフトウェアに関する権利の取得) 等への取り組みが貢献するとしている。調達システムの改革に当たっては、競争を増やし従来の軍事産業のみならず、革新的技術をもつ中小企業やスタートアップ企業との連携や早期の契約、柔軟な予算執行を可能にする制度の見直し等を実施している。

本 PS では FY2019PS ではほとんど見られなかった予算に関する強い問題認識 (「如何なる敵よりレディネスを痛めつけたのは予算」という強い表現) が改めて強調されている。レディネス回復が一朝一夕で出来るものではなく、同時に進める戦力規模の回復並びに近代化による優位性を保つ将来戦闘能力の獲得のためにも、十分な規模の予算が必要との認識を改めて示したものと考えられる。また、2021年が一応 BCA の期限であり、トランプ政権移行後の予算を巡る流れを後戻りさせないという強い意志の表れとも言える。

FY2020PS は、過去2年の PS 以上に分かり易さに意を用いており、簡明かつ端的な表現や構成になっている。問題認識や主張にかかるキー・センテンスを明示 (大文字、イタリック書体、本文から切り離しての掲載) する等の工夫が施されおり、議会に対する分かり易い説得に最大限の配慮をしていることが伺われる。

### 【FY2021PS】

ゴールドフィン参謀総長にとって集大成となる最後の PS である。戦略文書を受けて前政権から続く課題 (レディネスの回復、規模の回復、近代化の遅れ) に取り組み、最終的には大国間競争の時代に向けた将来の戦力設計 (Force Design) として、新たな統合全領域作戦構想 (JADO)



を提示すると共にその為の優先分野を示している。

NDS2018 の目標達成の為に、米空軍は次のことが出来る統合された戦力設計を追求しなければならないとして、4つの鍵となる資源投資分野を示している。①統合戦力の連結 (ネットワーク化)、②宇宙の圧倒的支配、③戦闘力の創出、④攻撃下での後方の実施、である。ここに焦点を当てつつ、戦闘指揮官に準備ができた戦力を提供すること並びに人材育成と隊員・家族の面倒を見ることを重視すると述べている。

将来のハイエンドな戦いにおいて勝利する為の作戦構想が JADO であり、その為の指揮統制システム (JADC2) の構築と先進戦闘管理システム (ABMS) の開発を重視していること並びに米空軍が JADC2 構築の努力を主導するとの意志が明確に示されている。また、戦闘力の創出のため優先されてきた近代化事業 (F-35、B-21、KC-46、F-15EX、T-7 等) に加えて、次世代航空優勢プログラム (NDAD) をプラットフォームとしてではなくシステムとして開発していく考えを示しており、プラットフォーム重視から JADO 構想下でのシステムへの転換を図ろうとする方向性が読み取れる。更に、デジタル設計技術におけるブレークスルー効果を狙って三つの緊要な分野 (①デジタル工学、②迅速なソフトウェア開発、③オープン・システム・アーキテクチャー) に投資すること、産業や企業との連携により技術革新を伴った装備品を少ない数でもより速く実戦配備することで、技術的優位性を維持しようとしている。

大国間の競争相手から A2AD で挑戦されることから、ハイエンドの戦いにおいても所要のロジスティックを実行できるよう、基地防衛の充実、垂直離着陸の輸送機等の装備化を進める考えを示している。2020年を統合基地防衛元年として、戦力投射及び戦力発揮の基盤である基地を防護する為に必要な装備や訓練を実施するとしている。統合による基地防衛を目指しているのは A2AD への対応を念頭に置いているものではあるが、米軍の中で戦闘域内の作戦基盤の防衛がどの軍種の所掌が明確になっていない点も伺える。

大国間の競争相手に関連する地域として北極圏の重要性を指摘しており、この地域における能力強化と関係国との連携を強化すると述べている。また、暴力的原理組織に対しては、軽攻撃プログラムの開発と実証を通じて対処能力の向上と実際の活動支援を両立させようとしている。更に、人材が最も重要なアセットであるとして、統合リーダーを育成する為に新たな評価基準を設けると共に昇任制度の見直し (昇任管理委員会の6分割化、早期昇任制度の廃止) を行ったこと、家族を含めた支援を充実させる旨を強調している。

### 3 まとめ

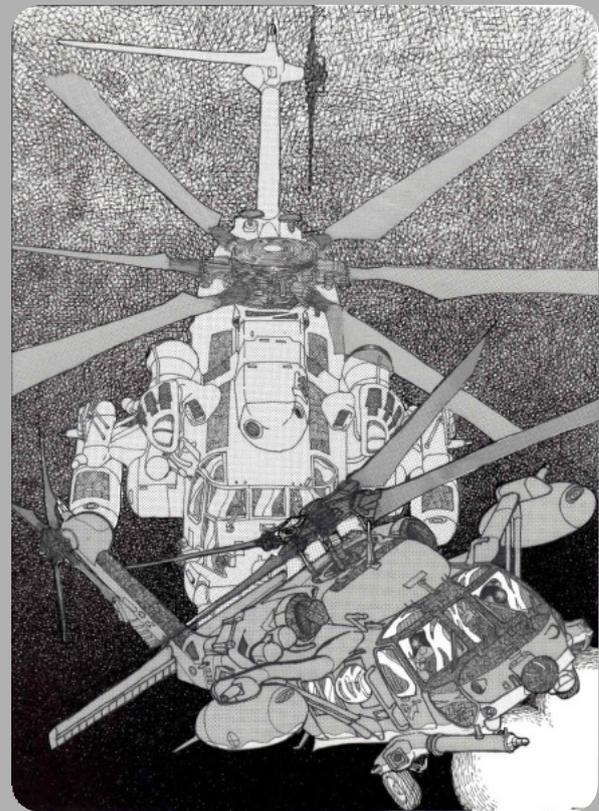
本稿は米空軍の将来動向を探るための手掛かりとして FY2017PS から FY2021PS の5年間の米空軍態勢報告 (PS) の概要とキーワード等の分析を試みたものであ

る。この期間は、大統領、米空軍参謀総長等、主要リーダーシップの交替並びに戦略関連文書（NSS、NDS）等の策定による国防政策の転換などの大きな節目であり、米空軍の問題認識と課題解決の方向性にも変化があったことから米空軍の将来動向を探るうえで大きな意義がある。特にテロとの戦いが継続することによる高いOPTEMPOが二十年以上継続すること並びに国防予算の抑制傾向が続くことにより、レディネスの低下、戦力規模の縮小、近代化の遅れ等は米空軍にとって継続する深刻な問題であった。その問題を解決しつつNDS2018が求める大国間の競争、抑止、勝利を追求できる態勢に移行することは決して容易ではない。ウェルシュ大將の後を受けたゴールドフィン大將は、この課題に真正面から取り組み、最終的には作戦構想（JADO）や装備品の調達改革、作戦基盤の防護や効率的な後方・整備体制の確立、核抑止機能を含む近代化の推進等の重要な取り組みを総合的に包含する新たな「戦力設計（Force Design）」を提示している。勿論、今後の進捗によって適宜見直しはなされるであろうが、大きな流れは変わらないものと推察される。新参謀総長ブラウン大將が就任後の方針として「ACOL：Accelerate Change or Loose」を示したことは前ゴールドフィン大將が示したこの新たな戦力設計（What）を継承し、その迅速な実現（How）に取り組むという意志の表れであるとも考えられる。その意味でブラウン大將が策定するFY2020PSにも注目し本稿で分析した5年間のPSとの比較を通じて違いを見ていく必要がある。

今回のPSの分析から見える空自へのインプリケーションとしては、次のようなものが考えられる。まず第一に、米空軍はNDS2018が求める大国間競争への対応を追求していく中で、新たな戦力設計に含まれる様々な改革を進めることが予期されるが、その核心は統合全領域作戦構想（JADO）であり、その為のJADOC2の確立やABMSの整備をスピード感をもって追求することが予想される。この動向をしっかりと踏まえつつ、米中の大国間競争の最前線に位置する我が国の位置づけを認識し、南西域の島嶼部防衛を如何に効果的に日米共同で行うか、その為に必要なことは何かを見極めつつ先行的に体制整備を行う必要がある。第二に、その為の鍵はセンサーやシューターのネットワーク化であり、軍種や領域を超えて連結しデータを共有できるC2系を構築することが不可欠である。米国としても同盟国との連携を重視しているが、米国からのアプローチを待っているだけだと米軍の基準や装備を受け入れることを強要されることは明白である。従って、日本としての領域横断作戦を実現できる独自の統合ネットワークやC2系統の確立が不可欠である。当面は、統合防空システム（IAMD）をひな型として検討を先行的に進化させておくべきであろう。第三に、米空軍が抱えてきたレディネスの低下、規模の縮小、近代化の遅れ等の課題は、空自にとって無関係ではない。平時における対領空侵犯措置の増加や大規模災害へのよ

り能動的な対応、様々な国との安全保障協力の推進など、自衛隊の活動に対する要求はどんどん高くなる傾向の下で、ミサイル防衛態勢の強化や抑止力を担保する新たな機能の整備、老朽した装備品の維持等を限られた予算で実施しなければならない。様々な課題の解決が予算や人的資源の制約などから思うように進まない状況も、問題を複雑にしている。個々の分野で出来ることを少しずつ着実に実施することも重要ではあるが、全体を俯瞰し戦力設計のレベルから見直し、総合的なネット・アセスメントによって課題解決の優先順位を付けると共に従来の発想に捉われず制度や仕組みを変えることによってブレークスルーする等、ゴールドフィン大將が主導した米空軍のアプローチについて大いに参考にすべきであろう。その為には、ネット・アセスメント等の新たな手法による総合的な分析、検討を行いつつスピード感をもって各種施策の検討・立案・実行ができるよう空幕を下支えできるシンクタンク的な機能の強化が重要である。また、組織が将来において如何なる試練に直面しても責務を完遂できる組織であり続けるためには、人材の養成とリーダーの育成が必須の要件である。米空軍並びに米宇宙軍が常に優先順位の第一番に掲げる人材の育成に関しては、空自としても現状を踏まえつつ、抜本的な改革に全力で取り組むべきであると考えられる。

(了)



「UH-60J &amp; HH-53C JOLLY GREEN GIANT」

作：富岡幹博会員

## JAAGA理事の活動紹介

### 総務理事

「JAAGA 理事の活動紹介」第2回は総務理事です。総務理事は、総勢8名と JAAGA 理事の中で最も多い数になっています。

総務理事の所掌業務は JAAGA としての活動や各理事の業務を支えるものです。その総務理事が大きな課題に直面したのが令和2年でした。

#### 【令和2年の特徴】

総務理事の業務は、長年先輩理事が蓄積してきたノウハウの上に成り立ってきました。例えば、毎月開催される理事会・役員会のセット。多くの理事が市ヶ谷事務所に集合し、顔を合わせて意見交換しつつ実施してきました。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染防止の観点から、事務所での開催を取りやめ、当初はメール交換形式で準備を行い、議案審議に関しては資料送付によって対応しました。メールによる意見交換ではタイム・デレイが生じるとともに、情報量に限界がありました。出席した各理事には十分に意見が反映できないとの思いがあったことと思います。秋からは ZOOM を使ったリモート形式の WEB 会議によって役員会・理事会の実施に取り組んでいるところです。WEB 会議開催当初は、議事進行がどうなるかと心配しましたが、回を重ねるごとにスムーズな進行となっているように思います。

リモート形式は、各理事への負担が低減する一方で、議題以外の情報交換ができなかったり、情報以外の物理的なモノの受け渡しができなかったりと問題があります。しかし、ウィズ・コロナの時代においては今後もリモート形式での役員会・理事会の開催を継続していくことになると考えています。今年就任した新総務理事に対しては、実地の業務を通して総務のノウハウを引き継がない状況が続いているため、JAAGA 総会等を従来の形式で開催するためには、何らかの対策が必要となりそうです。

#### 総務理事の所掌事務

- (1) 総会の開催に関すること
- (2) 役員会及び理事会の開催に関すること
- (3) 文書の発簡、来簡に関すること
- (4) 理事等連絡網の作成に関すること
- (5) 表彰及び記念品の贈呈に関すること
- (6) 米空軍慶弔への対応に関すること
- (7) 会則（施行細則を含む）の管理に関すること

#### 【JAAGA 表彰式】

JAAGA 主要行事の中で総務が主体となって取り組む事業の一つに「JAAGA 表彰式」があります。JAAGA 表彰式は、残念ながら一部の総務理事を除いてはほとんどの JAAGA 会員が参加できない行事だと思っておりますので、このコーナーでは JAAGA 表彰式について紹介させていただきます。

「JAAG 表彰式」は、航空自衛隊及び在日米空軍の相互理解と友好親善の促進に顕著な功績のあった日米隊員を表彰するものであり、毎年、三沢・横田・那覇基地で実施しています。

表彰対象となる隊員は三沢地区（三沢基地）、関東地区（横田基地、府中基地、入間基地）、沖縄地区（那覇基地、嘉手納基地）に在籍している日米双方の隊員です。受賞者の功績は、日米共同訓練等の職務上の日米交流に限らず、知的障がいのある人たちを招待して実施するスペシャル・オリンピックスのボランティア支援のような仕事を離れた個人的な日米交流の分野まで範囲が広がっています。

主催者側の手前勝手となりますが、JAAGA 表彰のステータスは年々上がっているように感じています。私は、現役時に三沢基地と横田基地で JAAGA 表彰式を受け入れ、退職後は JAAGA 理事（沖縄地区副担当）として那覇基地の表彰式に参加しました。現役時代と比較すると、日米の各部隊や参加者・基地周辺協力者をはじめとする



【2010】 JAAGA Award Ceremony, Misawa AB



【2019】 JAAGA Award Ceremony, Misawa AB

式典参加者数が格段に充実しています。特に米空軍の JAAGA 表彰に対する認識が変化しているように感じます。第 5 空軍司令官や太平洋空軍司令官経験者等を JAAGA 名誉会員としてお迎えしてきたことで、米空軍の中で JAAGA に対する認識が深まってきているのではないかと思います。

JAAGA 表彰式は、準備段階から部隊はもちろんのこと、渉外をはじめとする多くの理事、そして JAAGA 地方支部の協力を得て取り組んでいます。準備は、実施日程の調整と被表彰者の推薦依頼にはじまります。日米双方の予定の調整が必要であることから渉外理事には難しい調整をお願いしています。

表彰式に合わせて JAAGA 主催の祝賀会も実施しており、緊張した表彰式とは異なり、祝賀会は受賞者ご夫妻を囲んでの和やかな雰囲気の中で行われています。表彰行事終了後、航空幕僚長、関係部隊長、基地周辺協力者に礼状を送付して一連の JAAGA 表彰式関連業務は終了となります。

JAAGA 表彰式は、表彰される日米双方の隊員にとって大きな励みになるばかりでなく、式典に参加する現場部隊の皆さんに JAAGA を認知していただく絶好の機会でもあります。仮に今年度の表彰式を、「3密」を回避するため関係者限定のような形で開催することになれば、広報効果が大きく低下します。先に申し上げましたように JAAGA に対する日米部隊の認識は深まってきています。日米同盟の重要性がこれまでになく高まる中、JAAGA 表彰式を継続することによって、同盟の基盤となる日米隊員関係強化の一助となれば幸いです。日米双方の部隊において JAAGA の認識を深めることができれば我々にとっても大きな喜びになります。そうできるよう総務理事として努力していきたいと考えています。

最初に申し上げましたように、総務理事の業務の主体は JAAGA の活動を支えるものだと考えています。新型コロナの影響でさまざまな活動や行事ものが実施要領の変更を余儀なくされる等、JAAGA の運営も過渡期にあるように思えます。今後の JAAGA の活動や運営に関して改善すべき点等がありましたら、近くの総務理事にお

JAAGA 被表彰隊員

地区	実施場所	被表彰隊員	
		航空自衛隊	米空軍
三沢	三沢	三沢基地司令推薦者	三沢基地司令官推薦者
関東	横田	横田基地司令推薦者	横田基地司令官推薦者
		入間基地司令推薦者	
		府中基地司令推薦者	
沖縄	那覇	那覇基地司令推薦者	嘉手納基地司令官推薦者



JAAGA Award Ceremony, Yokota AB, 2019



JAAGA Award Ceremony, NAHA AB, 2019

声がけください。皆さまのご理解とご協力、よろしくお願いたします。

(前原理事記)

新入会員紹介

正会員 (Regular Member)

氏名	住所	氏名	住所
佐々木 裕	北海道札幌市	金森 新士	愛知県常滑市
長井 竜夫	東京都東大和市	三谷 直人	東京都小金井市
松尾 洋介	福岡県春日市	丸茂 吉成	東京都江東区
小袋 長武	福岡県北九州市	河江 啓介	東京都町田市

## 投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お蔭様で令和2年7月で創立24周年を迎えました。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。『JAAGA だより』も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

### 【連絡先】

（郵便）〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町9番7号

ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

（メール）pubaffair@jaaga.jp

## 賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

加えてこのたび、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿を、幅広く募集することといたします。

テーマは自由、1件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400～2,000 字程度）、写真、図表等を含めて頂いても結構です。連絡を頂いた方には、広報係から細部要領等についてご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

### 【法人賛助会員の皆様】 34 社

株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、有限会社エム、株式会社エクシオテック、川崎重工業株式会社、KYB 株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、新明和工業株式会社、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、株式会社日商ファイナライフ、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、株式会社日立製作所ディフェンス営業本部、富士通株式会社、測上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、横河電機株式会社、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド

### 【団体賛助会員の皆様】 2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

### 【個人賛助会員の皆様】 89 名

これまでも「JAAGA だより」の一部の記事は、投稿者の皆様の善意により支えられてきました。その善意に少しでもお答えするために、投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

これからも積極的な投稿等をお願いいたします。

JAAGA 広報理事一同



タイピン



ピンブローチ

## 会 員 募 集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 8 名の入会を得ることができました。
- 2.11.15 現在、正会員数 262 名、個人賛助会員数 89 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 34 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。  
推薦若しくは情報提供を頂いた方には、直接会員担当理事から連絡させていただきます。

### 【入会資格】

- 正 会 員：航空自衛隊の OB
- 賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

### 【連絡先】

- 郵 便：〒160-0002  
東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F  
日米エアフォース友好協会 会員係
- メール：membership@jaaga.jp

## 【 編 集 後 記 】

- ◇新型コロナ禍の影響を受けた 58 号に続き、今回の 59 号も、テレワークでの作成となりました。
- ◇JAAGA が参加・支援する航空自衛隊・米空軍の行事が COVID-19 感染拡大防止のため相次いで中止・規模縮小になり、会員の皆さんが楽しみにされていた JAAGA 主催の行事も制約を受けていますが、その分、JAAGA だよりをお楽しみください。今号は、独自の取組や多くの寄稿・投稿により、深みのある内容になったと自負しています。
- ◇前米防駐官鈴木 1 佐、PACAF 連絡官倉地 1 佐から寄稿頂きました。JAAGA の存在と活動の意義がにじみ出ており、JAAGA 会員であることの意味を改めて噛みしめています。
- ◇56 号で、空幕部長等講演会当日に小惑星探査機「はやぶさ 2」がリュウグウ着陸に向けてホームポジションからの降下に入ったことをお伝えしましたが、編集作業追い込み中の 12 月 6 日未明、「はやぶさ 2」から分離されたカプセルが大気圏に突入し、火球となり、地上でビーコンを受信したとの生中継に接しました。大いなる勇気をもらいました。国際宇宙ステーション (ISS) 滞在中の野口聡一宇宙飛行士も、目視されたそうです。今後の採取資料の分析に期待するとともに、別の小惑星に向けて 11 年間の新たな旅に出発した「はやぶさ 2」の第二の人生に幸多かれと祈ります。
- ※ ※ ※ 以下、編集担当者の感想を紹介します。※ ※ ※
- ◇豪州先住民アボリジニから、「この土地を訪れた日本の皆さんを歓迎します。カプセルがこの土地に無事に着地することを祈っています」と、彼らの「聖地」での「はやぶさ 2」カプセル回収を歓迎するメッセージが発せられたことは、日本人の「心」が受け入れられことを意味するのではないのでしょうか。海外勤務中に「日本は決めたことは必ずやるので信頼している」と他国の方から言われたことを思い出しました。(K)
- ◇COVID-19 の世界的な感染拡大で日常生活を大きく変えなければいけない 1 年でした。JAAGA だよりの作成にも影響がありましたが、創意工夫と皆様の協力のおかげで読み応えのあるものになりました。ありがとうございました。(F)
- ◇この新型コロナ禍の大変な環境においても、あらゆる事態に即応する態勢を維持する日米同盟の姿を見て、改めて頼もしく思いました。(I)
- ◇COVID-19 の流行により JAAGA の活動にも様々な制約を受けた一年でした。一刻も早い終息を願ってやみません。(A)
- ◇JAAGA 「バーチャル懇親会開催」を担当しました。初めての担当が英語での懇親会！聴き取りもままならない状況からの書き起こし、不慣れな記事作成とたいへん苦勞しました。多くの方々のご指導をいただき、なんとか雰囲気をお伝えできる記事にまとめることができました。今後ともよろしく願います。(O)



作：山本康正OB

編集担当 (広報理事)：木村和彦、福永充史、池田五十二、浅井玲、太田徹

JAAGA だよりは、JAAGA ホームページからもご覧頂けます (創刊号から第 49 号までは、「20 年の歩み」に掲載)。